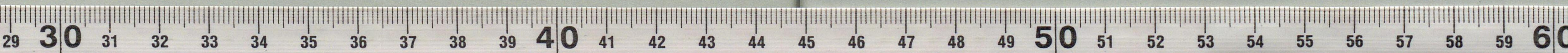
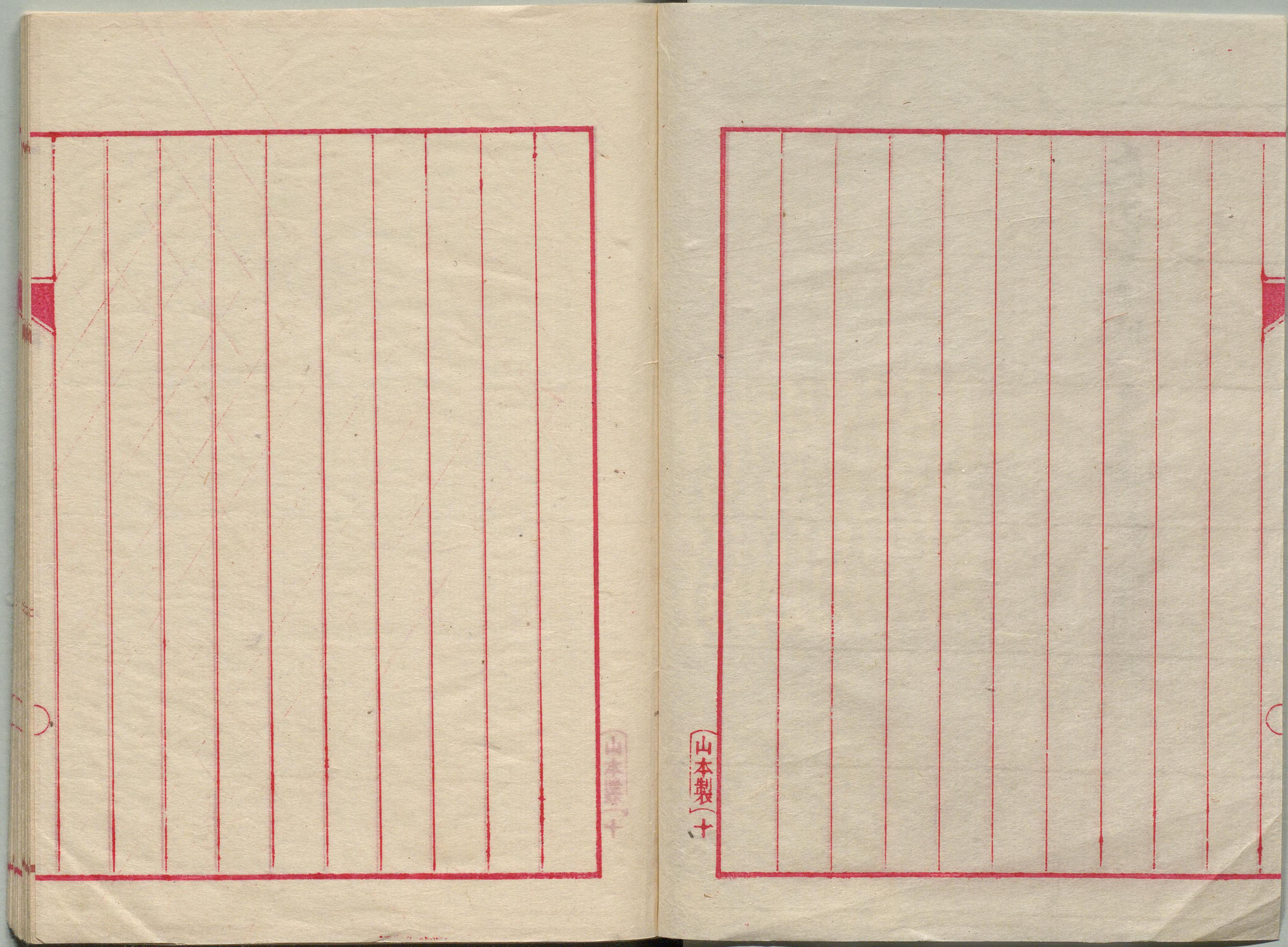


長州參議政治意見書類
從明治十五年

尾崎三良

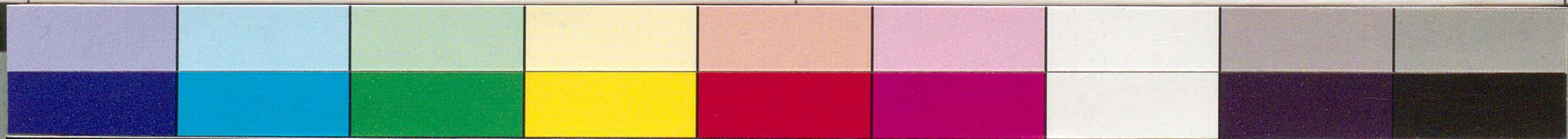
尾崎三良





山本製

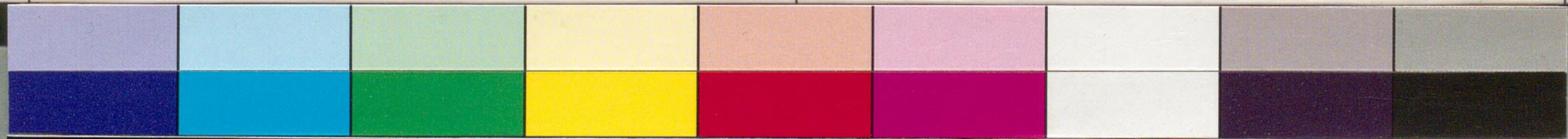
山本製



国立国会図書館 尾崎三良関係文書 128

夢に三急景、命に留一如前、山林、世變、下
伊藤參議建言政體之件、明治十三年
惟博文誠惶誠恐、臣、重職、又、瀆、所、深、時、難、又
思、之、竊、意、惟、惟、今日、之、事實、固、曠、者、之、世、運、際、際、
風潮、ノ、勢、寝、ク、變、革、ノ、機、臨、ク、而、以、之、新、進
輕躁、之、說、也、之、徒、誤、人、教、育、之、徒、未、ト、貫、亦、一、概
言、遵、守、之、難、也、機、ヲ、迎、テ、變、ヲ、制、シ、調、護、方、ヲ、以、措
置、宜、ヲ、得、漸、ク、進、為、以、此、所、更、ル、ニ、非、サ、ル、ヨリ
ハ、万、世、久、安、因、基、其、上、將、々、何、リ、望、シ、乎、蓋、今、中
興、之、業、僅、宜、其、成、也、ヲ、告、ケ、タ、リ、而、事、ヲ、時、事、俄、カ

山本製十



ニ危機ニ逼ルカ如キアリ以テ無事ニ安スヘカ
ラサル者其因ヲ来ル所ニアリ臣請フ先ツ其因
ル所ヲ論シテ然後ニ措置ノ宜キニ及ハシ
第一維新ノ政曰ク改メ新ヲ敷ク其大ナル者ヲ
廢藩置縣トス廢藩ノ拳實ニ已ムヲ得サルニ出
ズルニ兵制ノ變メ以テス藩國ノ士族徒テ禄ヲ
失テ産ヲ削ラレ、者全國ヲ拳テ幾十萬是皆
新政ヲ悦ム不悦ム行動モ之ニ曰慣ヲ慕ヒ不平
ヲ鳴シ不祥ヲ訴ム其情アルヲ免レズ其極一
變シテ急激ノ論ヲ唱メ政府ニ抗抵シ世變ヲ激

成存以テ自快カク不悦無異而シテ其後ハ已ミテ
トス是ハ勢由來ル所非シ雖武門ノ
世百於此ハ實業平民トシテ俸給曾テ常禄ヲ食
ニ常産ヲ有シ教育素缺リ國事自ラ任ズル習
トスルヲ以テ其今日ニ至ラズ猶好テ政談ニ縱
義氣節議論ハ世多ク其間ニ出テ勢業流ニ居
東庶民ノ方向ニ專ラ其麾ク所ニ視ルヲ及身
間警カレニ士族ハ猶ホ筋骨ノ如シ平民ハ猶ホ
皮肉ノ如シ筋骨ノ動ハ所皮肉之ニ從テ蓋シ其
類ハ怨氣團結スルヲ以テ朝野ハ阻隔ニテ

王化ヲ壅塞スルニ足ル今日士族ノ向背ハ已ニ
王室ニ純ナラスシテ而シテ天下ノ禍機往々其
間ニ伏スルモノアリ
第一一郷ノ人心ニ制シ易ク一國ノ物情ハ治メ
難シ一國ノ形勢ニ轉シ易ク一國ノ風氣ハ回シ
シカタシ現今天世變ハ宇内大勢ノ推致スル所
ニシテ一國一州ノ事端ニ非ザルナリ今ヲ距ル
百年歐洲變革ノ說一々ニ佛朗西ニ行ハレシ
ヨリ漸次各國由浸滲シ相扶ク相擁テ積年夙勢
ヲ成シ凡ソ皆政ノ國早晚其變ヲ被ルナリ

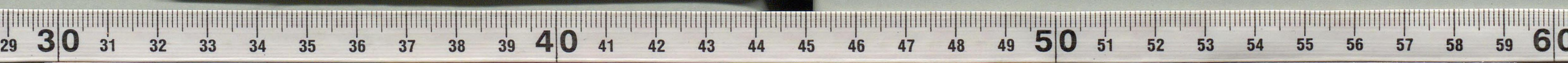
ア然ルニ其日ヲ變ニ新ニ就クニ當テ激シテ
乱ニ至ルモノナラズ今言ニ至テ輒轉シテ未タ止
マサルモノナリ明君賢相其幾ニ先テ其變ヲ制
シ一轉ニテ國ヲ固ク保テ其變ノ及リ之ヲ要スル
ニ皆專裁ノ風ヲ棄テ人民ト政治ト權ヲ分クテ
ヲ免レズ今歐洲ノ文物駿々トシテ我國ニ入ル
而シテ政体ノ新說亦士族ノ間ニ行ハレ數年ノ
間都鄙ニ漫延シ邊ニ防遏スルカラス其間徒ニ
紛言ヲ為シテ以テ人聽ヲ聳カスモノナリ輕躁
妄作上意ノ在ル所ヲ知ラズ病ヲ呻吟シ狂

暴人ヲ惑スモノアリ然ルニ其由ル所ヲ通觀ス
ルトキハ亦皆寰宇ノ間ニ行ハルニ風氣ノ被ル
所譬ハ猶雨露ヲテ草生スルカ如シ深ク怪
ニ足ラサル也
以上二因ハ皆天步時運ヲ致ストトコ口幾シト人
事ノ為ル所ニ非ズルナリ今日ニ在テ政府ノ任
トスル所ハ方ニ幹旅調護勢ニ順ニ機ニ乘シ之
ヲ制スルモ激ニ望ミ去之ヲ縱ツテ慢ニ至ラズ
進歩序ヲ逐緩急宜キ今當リ歲月ヲ積累長テ以
テ標準ニ馴致スル處在テ其謀ニセザルニ異カレ

此後ニハ
元老院ヲ更張シ元老院議官ヲ華族ニ撰
スルヲ諸事ニ任ズルハ大外ニテ貴族ニ
臣弼茲國會ニ未タ處カズ起ス下議至不謂
臣等自ヲ誓ス一毫權ヲ貪リ位ヲ固クスル念
胸中ニ芥蒂因ルニ式アラズ唯ハ國會ヲ起シテ以
テ君民共治ハ大局ヲ成就スル長計甚ク望ムナリ
事ナリト固ニ事苟ニ國体ヲ變更ニ係ル實ニ曠
古ノ大事決テ急驟ヲ以テ為ス下キモノニアラ
ズ今先ヲ基地ヲ固クシテ柱礎ヲ構具終ニ明屋

茨ニ及テ舉行ノ次序固ヨリ緩急アリ是レ既ニ
陛下明睿ノ洞照スル所多言ヲ待タサルナリ
臣慎テ歐洲立憲ノ國ヲ觀察スルニ上下兩院ハ
車ノ兩輪アルカ如シニツノ者相制シ即チ平衡
ヲ得其帝王國ニ在テハ元老院院即上ノ設ケ尤モ
國家ヲ保持スルニ要用アリ蓋シ歐洲各國或ハ
之ヲ庶民會老成ニ撰ヒ或ハ之ヲ勲望碩學ニ取
ル而シテ其帝王國ニ在テハ太抵之ヲ貴族ニ取
ル即チ帝室ヲ扶持シ旧物ヲ保守スル所以ナリ
臣竊ニ以テ今ノ時ニ當リ漸進ノ道ニ由リ以

テ時變ヲ制シ徐々ニ釐革ヲ行フ所ナリ
先ツ元老院ヲ更張シテ後實相副實相ハルニ
若シテ支那也元老院ヲ正テ名實相副ハルニ
トセバ之ヲ華貴族ニ取ルニ在リ明後何年元老
院ノ設ケハ實ニ立憲漸進ノ華士ハルニ
聖意ニ出ツ而シテ亦ハ太極保諸臣即太猷ヲ贊
襄スルニ亦此レニ倚リ以テ朝野ヲ調護スルニ
宜ト奉ルニ非スルハナラス但ハ當時創造先ツ
其規模ヲ定ムルニ止マリ未ダ其實用ヲ收ムル
ニ違アラズ其更張潤飾實以テ名ニ副ハルニ



に至らば仍も今日待たずして今日なり天下
其物品流の概論を以て其國事を擔當する文
明を率先するに堪ふるも士族の望む所なり
不得し而して士族の位置を固り宜しく貴族の
重部たるに誠を能く士族を以て明に華族
の下に列せ元老議官を專ら華士族の中に公撰
し旁ら國家を勲績に士庶の碩學を任用し百々
を以て定員中を定むるに俸給を以て之期を
定むる徵集を允文法律の文藝皆是議を經せ
之に交り國政に士族を榮用せし其報効を収

永遠に皇室の輔翼たりて之を以て其の
來りて爲す先之西院を平衡の地と爲す
不致に朝野の平均を保ち調護の意を失は
ず其の以て成り成緒を續き先輩の遺圖を從
漸進の途を履き其の以て之を以て其の
以て公撰検査官を設けしに請ふ事國政の
臣又竊に以て元老議官を華士族を撰む以て
公議の廣く其の外更に検査院員外官を府縣會
員の中に采り以て財政を公議するに漸く開
此に亦立憲の初步なり

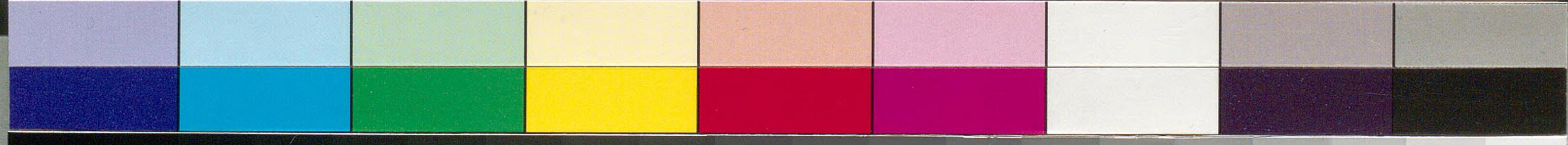


蓋し何れ國ヲ論せず國民ノ政府ニ向テ猜
嫌ノ心ヲ抱キ官吏ヲ敵視スルニ至ル者ハ概シ
其濫用厚歛ヲ疑フニ非サルハナシ故ニ立憲ノ
國ハ又先ツ財政ヲ拳テ國民ト公共負担スルヲ
以テ最大ノ務トセサルハナシ我國維新以來
徳川氏積弊ノ弊ヲ兼ケ加フルニ戦乱相継キ外
交頻繁非常ノ需ヲ浩漭費ラシテ而シテ海陸軍
ヲ興テ裁判法ヲ改良シ教育ヲ盛ニシ警察ヲ嚴
重ニシ監獄ヲ建造シ鑛道電信ヲ創テ道路ヲ開通
シ凡シ以テ人民ニ利ニ公益ヲ啓ク所ハ者ハ國

ノ全カヲ盡シテ一時並ニ拳ケ又他ノ一方ニ於
テハ地租ヲ改正シテ以テ農民ヲ豊ニシ資本ヲ
捐テ以テ以テ百工ヲ勸ムル等凡ソ上ヲ損シテ
下ヲ益スル事為サニル所ナシ十年久聞國庫窮
テ告クハ專ラ是レニ由ルナリ蓋シ政府ノ用心
ハ公平ニ公明ニ存シ以テ天下ヲ對シテ曖昧欺詐
ハ拳アルニ非ス以テ後世ニ証明シテ一毫瀆亂
不經ハ羞マレ非ス但テ事由ヲ解セテ其者好
テ當局ヲ指搦シ甚キハ誣ルニ捏造ノ說ヲ以テ
スルニ至ル是レ政府ニ在テ口舌ハ辨スルニ所

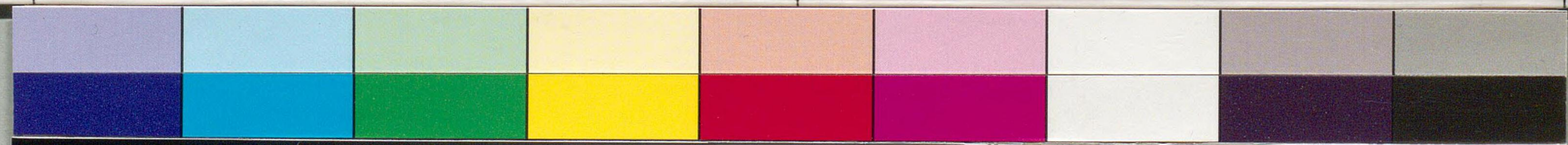
ニ非ス唯タ誠ヲ啓イテ公ヲ示シ人民ヲシテ進
テ財政ノ精確セルヲ見証セシムルノ一法アル
ノ今暫ク府縣會議員ノ中ニ公撰ニ検査院員
外官トシテ予アルニ俸給ヲ以テ官撰検査官ト
相平衡ニ以テ検査ノ事務ニ從事セシムルニ而
シテ其権限ノ如キハ專ラ會計検査ヲ止メ敢テ
用財ニ大政ニ干渉スルヲ許サズ是レ一ニハ
以テ財政ヲ公議スルニ漸進ヲ路ト為シ此ニハ
以テ人民ヲ知テ實務ニ慣熟セシメ其經驗ヲ充
テ更ニ公議ニシテ一制度ニ整テ又此ノ一ニシテ

抑此ニ件ノ議若シ果シテ奉行スルニ至ルニ行
政ノ事前日ニ比スルニ限束スル所アリ又免レ
ス而シテ諸臣ノ責亦更ニ一層ノ重大ヲ加マ
シ一夕ニ制御ノ道ヲ誤ルルニ非テ物議ヲ増シ軌
轢ヲ激シ以テ事變ヲ促スル至ルニ亦知ルニカ
ラズ是レ尤モ事前ニ慎重セザルニ力ヲ及ル者
ニシテ其組織権限撰挙ノ方法節目亦皆治安
ノ關鍵ニ非テハハナシ閣議以テ之ヲ苟且ニ付
一カラス其裁制断行ニ至ラハ一ニ
皇上陛下ノ明睿ヲ仰クナリ



皇土聖裁ヨリ断ニ天下ノ方向ヲ定ムルヲ請フ
天下ノ方向定ムラザレバ天下ノ人心何ノ底止
スル所ナラズ今都鄙羣々公議ヲ名トシテ乱階
ヲ煽ク今ハ時ニ當テ上タル者大猷一定不拔ノ
議ニ據リ明ニ其意ノ在ル所ヲ啓示シテ以テ人
心ヲ防範スルニ非ヤレハ民相率ヒテ多事ヲ為
シ東伏西起防潰ニ水決ニ狂暴一夕ニ唱ヒテ終
ニ收拾スルカヲカハルニ至ラレバコトヲ恐ル況ヤ
従前政府ノ令スル所或ハ標準ヲ示シテ未ダ順

序ニ録西對英及ハ其ル者アリ知テ其安者或ハ
以テ之ヲ言陳シ詳悉有之其行スニ果然スルヲ為
ス然業ノ徒ハ戊辰ノ御誓ヒ亥ルハ其ノ標
勅諭ヲ引縁ニテ以テ立シ人詭ヲ附會スルヲ至
此此政府ノ實ニ其意ヲ加ヘテ一々ヒ維持整理
戒飭教諭ス其意所及者ナリテ之ヲ亦其
今ハ年來來上廟猷ヲ推廣シテ躁急婚人必其防
範セント欲セバ臣竊計仰テ示シ
皇上陛下親臨ス大聖裁ヨリ断ニ至誠ヲ開示シ
主トシテ天下ニ告登ルニ漸進ノ義以テ之入



民ヲシテ明カニ聖謨ノ在ル所ヲ知ラセテ
之ハ之ヲ祈ル夫立法ノ大柄ヲ分テ人民ト之
テ公ニスルハ予奪ノ権一ニ唯ク

陛下ノ專有ニ至テ臣下トテ敢テ擬議ス
ル所ニ非ズ其緩急早晚ニ至テモ亦唯ク

陛下ノ時ヲ量リ宜キヲ制シタマフニ在リ而シ
テ人民ハ敢テ争競逼迫スル所ニ非ズルナリ

陛下曩ニ漸次テ立憲ノ政ヲ肇ムルノ詔ヲ敷キ
玉テ履行期仍未歳月ヲ積累スルニ後ニ在リ
之ニ其間操縦手ニ在リ睦富ニ以テ是世

陛下ノ必ス重ク以テ自ラ任シ玉テ所ナリ今誠

ニ聖詔ヲ渙発シ大義ヲ昭示セハ天下ノ臣民

心ヲ王室ニ存スル者必ク向テ所ヲ知り而シ

テ無知ノ民亦從テ狂暴ノ為ニ惑ハサル、丁テ

免レ世世實ニ懇祈自勝ハサルニ至ルニ至

臣又謹テ陳ス

陛下聖德夙成遠矣千古ニ邁ク而シテ時運ノ易

カ亦世亦前世ノ比ニ非ズ今且婚盟強愈精誠

勸励ニ遠大柄ヲ總攬ニ定議矣主持ニ危ヲ轉

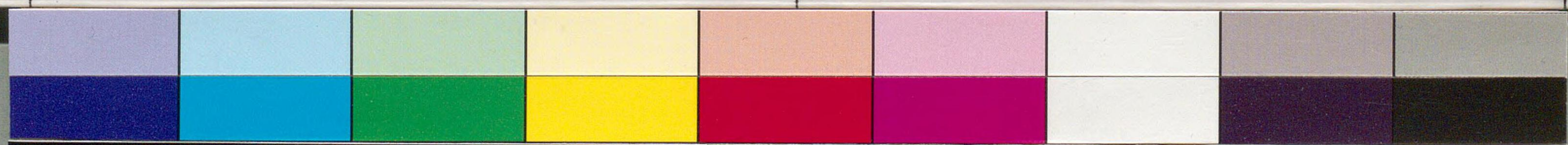
安ナリ漸次歩ヲ進メテ以テ大局ヲ完成ス

凡六十一年御膳也... 陛下ノ乾剛不息... 臣博文誠惶誠恐戰栗... 謹奏

明治其三集五月十日 參議伊藤博文

無味ノ月亦... 王室ニ... 聖旨ヲ... 陛下ノ...

一、固ヨリ... 蓋シ也井上參議建言政體之件... 明治十三年... 僕曩喜西洲ヨリ至リ... 切論ニ終ニ方今我政府ノ執ル所ノ政略果斷テ... 輿論公議其方向ヲ同業於テ... 進出ニ足ルカ将来ニ政策ヲ如何セハ則チ... 皇基ヲ無究ニ固シク... 得ル事カ亦難問ニ及ビ... 此意方今ノ政策ニ... 與テ...



輿論ノ歸向スル所ヲ從テ國會ヲ起スル即今第
一急務ナルヲ以テ其想ヲ一閣下ノ耳底今
猶餘響ヲ存スルモノヲ以テ然ルニ其民法ヲ編
定憲法ヲ制シテ而後國會ヲ起スル至ルヤ事頗
ル錯雜ニ亘リ決シテ未吐テ數言ヲ説盡スルモ
其論非テ故其更向之ヲ筆紙ニ載同一層詳ニ其
理由ヲ説テ其次第ヲ序テ其是非ノ間ヲ不聞ク
對身喜シク信シテ其意ヲ開テ其事ヲ
蓋シ政体ニ其藏其底ヲ從テ組織スルモノナ
シハ固ヨリ種々ノ異アルハ當然ナリト雖モ其

為政者々則テ其政体ハ異同ニ拘テス各必ス隱
然據テ以テ其政策ヲ施ス所ハ予々無ク可クヤ
此亦且假令餘深ク明至ク知テ得其威權ニ據テ
以テ臣民ヲ駕馭スルヲ知テ又數萬ノ強兵ヲ擁
護其威カヲ據テ以テ人心ヲ威服スルカ如キ又
我黨派ノ勢力ヲ據テ以テ天下ヲ左右スルカ如
キ大ニ德化ヲ施シ其希望ニ據テ以テ上下ノ
平安ヲ保ツルカ如キ是ナラザレバ其據ル所ノ
至ル公谷殊異ナリト雖モ隱然必ス據ル所ノ
至ル其撥テナラザレバ當時我政府ハ如ク

徒至内閣大無事ヲ謀其了ヲ之山務力為大ニ甄
然據此所ナリ漫然定ル所ナク姑息苟安以テ日
卒起ル所ノ事項ヲ造ヒ猶之ヲ譯言スルヲ專ラ
内情ニ心配シテ政事ニ當坐ノ間ニ合テテ以テ
宜下スル中ハ則チ昨日下是下スル所也今日ハ
非下ナリ申部向テハ得策ヲ知ル人モ乙ニ向テ
ハ先策ヲ夕ニ知免ル不果ニテ斯事如以テハ
獨我皇國ノ福利ヲ増進スル能事甚クナリテ
又我明治政府ヲ永久ニ保持スル甚難カレテキ
智者ヲ待テ而右利知事ナリテハ必ズ

試ニ我政府當時ノ狀況ヲ看テ看テ其威力果
ニ知人心ヲ威服知ルニ是ルカ思名明治初年
万事銳進儼然非兵ヲ握テ強藩ヲ擁セテ時ニ際
ニテハ其或ル之ヲ期スル者モ既矣今日ニ至テ
ハ威權漸ク衰萎ニテ殆ク十幕政ヲ數歩ヲ讓ル
テ狀勢更ニ然レハ則チ我為政者ノ黨力果ニ衰
テ下ヲ左右スル能事會カ曰ク當初ニ概ニ薩長
相協ニテ以テ政府ノ權威ヲ保持セシニ近年
來其勢力次第ニ減少セシテ今ニ至テハ間乎又意
見相異ニテテ權力ニ出テテ其憂ヲ以テ然レ



則其德義ノ果也人望ヲ收攬スルニ足ルカ
曰夫今帝即位ノ初ニ方テ五事ヲ神明ノ誓ハ
引出テ明治八年漸次立憲政体ヲ設ルルニ
聖詔ヲ垂ク從テ府縣會ヲ開キ民ニ其地方政
務ヲ參與セシムルニ拘テ其巷ニ説キ街ニ議
シテ政府ヲ怨望スル者天下到處下見テ之ヲ
中ニハ其抑々地獄ノ政務ニ參與セシムル等
ハ幸ニ德政ノ事柄ニ相違ハズ之ヲ人民ヲ取テ
ハ昨日ニテ武断政治ノ軌下ニ屈伏セシ者俄
テ自由ノ民ヲ得ルヲ以テ須テテ撃壤鼓腹

以テ之ヲ感戴スル者ニ却テ斯ク怨讟ヲ来シセ
ルモノ他トシテ我施為ニ能ク地歩ヲ占ムル
與テ之ヲ失セシモノ元來人心ヲ收攬スル者政略
ニ當テ水泡ニ屬セシモノ其才ヲ却テ之ヲ棄害
又招ク至ヒリ此數多ク者其原ヲ繹ルルニ
我政府常ニ内情ニ憂々タルヨリ其政策ノ據ル
所未タ之ヲ一定スル暇ヲナク其施為スル所
朝轉夕移シテ未テ方向ノ常ヲキ恰モ伍佰ト一般
ルニ職下ニ之ヲ由ル猶之ヲ推究スルハ當政
府ノ組織一種奇異ナルヨリ自ラ然ラサルヲ得

ナル理勢アリ是固ヨリ閣下ノ能久知了スル所
ナレバ更ニ僕ノ喋々ヲ要セサル一ニハ當也
抑維新以來我政府巨万ノ資金ヲ費消シ以テ
斯民ヲ利導セシモ純美ヲ教化未ダ起ラズ天富
ヲ殖産未ダ充分ニ登セズ輸入ノ常ニ輸出ニ超
過シテ金貨日ニ隱此措幣月ニ低以加之國會論
者四方ニ蜂起シテ務テ政府ノ失策ヲ咎メ遂ニ
國會ノ設立ヲ逼迫スモ其踵ヲ太政官門ニ
絶タサレハ至ル是豈ニ國家ニ禍福政府ニ安
危相判ル風波秋ト言ハサレ可ク此危急ヲ

際ニ立テ猶恬然意氣分セズ苟安以テ斯日ヲ送
ル去ラシトセバ日本帝國ノ福利果シテ之ヲ永
遠ニ増進シ得ハキカ明治政府ノ安固果シテ之
ヲ長久ニ保持シ得ハキカ僕實ニ言フニ悲ヒサ
ルモノアリ
然レバ則チ今日ノ計ヲナス者如何ナラ可キ
ルカ僕以為ラシ輿論ノ歸向スル所ヲ從テ國會
ヲ開設シ以テ政府ノ組織ヲ一變シ以テ其據ル
所ヲ確定スルニ若クモ人ナシト願フニ明治六
七年ノ交際際ニ始テ民撰議院論ヲ起シルヤ當

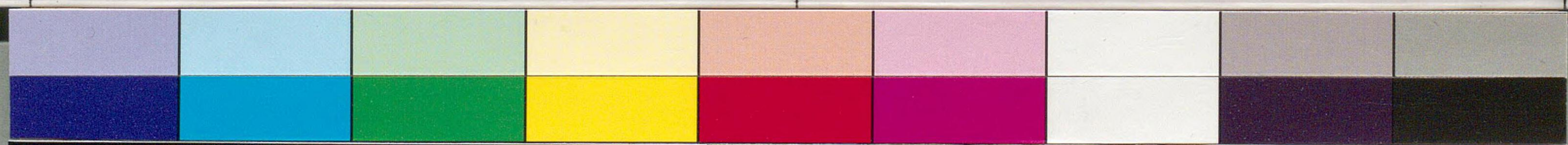
時少ク識見アル者ハ皆其太早計ヲ嗤笑セサル
者ナカリシモ世人ノ知識頓ニ一進シ人民ノ幼
稚ナル國會猶早キヲ怨ム杯トハ却テ迂論タル
ニ至リ今日ノ人民既ニ六七年ノ人民ニ非レハ
則チ其輿論ノ歸向スル所最早妄ニ威權ヲ負テ
以テ之ヲ逆フ可ラサルナリ況ニヤ其威權モ漸
ク衰萎セシテ於テヤ其威權ニ言ハレ
夫レ國會一タヒ起レ即政府ヲ組織自ラ一變ニ
政策ノ據ル所亦タ一定セサレテ得ス若夫レ依
然ト立テ政府ヲ組織一變セズ政策ノ據ル所一

定セザレバ則テ政府ト安固長ク保ツ能ハズ何
トナレバ百般政務ニ基タル天下ノ法制又國許
多事業ノ本タル國庫ニ出納ニ関スルモ其概
ニ國會ノ論定ヲ經サレ可ラサレテ以テ若シ隱
然内ニ據ル所アリテ前後我主義ヲ一ニスルニ
非レバ毎ニ衆論ニ揺カサレテ我目的ヲ達ス
ル能ハズルニキナリ夫レ然ル今日國會ヲ起ス
ル獨ニ民心ニ従テ以テ國家ノ福利ヲ増進スル
大ニ其力ス政府ノ組織ヲ愛シ政策ノ據ル所ヲ
定テ以テ明治政府ノ基礎ヲ鞏固ニスルニ於テ



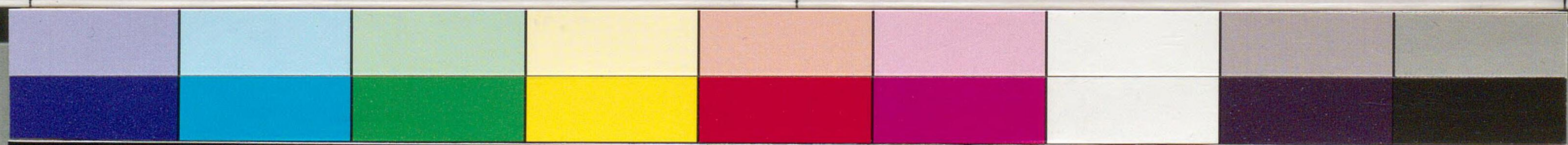
實ニ必用缺ク可ラサルモノナリ
夫レ精神善ナルモ結果悪ナレハ初ノ善モ却テ
惡ニ變テスルアリ彼ノ佛國ノ自由黨モ其初何ソ
悉ク狂暴ヲ逞スル意ナラシ但ク其忿怒ノ激ス
ル所一旦潰裂支出シテ散テ國王ヲ市場ニ劔ニ
ル迄残酷ヲ極メレヨリ事勤モスレハ狂乱ニ涉
リ遂ニ此状ヲ以テ國俗ト成テ来ルモノナリ如キ
即チ是ナリ精神未ク純正ナラザルモ結果良好
ナレハ不正モ亦ク正ニ歸スルアリ世ノ強國カ
土地ヲ貪ルル故カ以テ徑ニ理ヲ枉ケテ他ト爭

端ヲ開キ其戰克テハ則チ名義自立シカ如キ
是ナリ而シテ是等ノ其一例ヲ挙ケテソノ終ニ
古今ノ史乘ニ徴スルニ其例實ニ枚擧ニ遑アラ
ザルナリ要スルニ何等ノ事業モ其精神ヲ扱置
キテ意ニ其結果ニ美惡何如ニ廷視スルモノナリ
就中社會ノ秩序ノ如キ一旦紊乱スレハ縦令
何等ノ英材豪傑アルモ復ク之ヲ收拾スル能ハ
ズ即チ國會ニ於テ此モ之ヲ開クハ今日暫クモ
忽ニ之ヲ可ラサルコトナリ蓋シテ亦ク序次ナリ豫
備アリ若シ其豫備ヲナサズ其序次ヲ踏カズ時



既ニ至ルニ謂ヒ邊ヲト突然之ヲ開ケテ秩序
時ニ紊乱ニテ明治政府ノ安固暫ク保ル能ハル
ル内無論將來為政者ト更迭下ルニ臨ミ英米西
政黨ノ兩々相率ヒテ一進一退主客平穩ニ相代
ルカ如キルヲ得ズ必ヤ鐘ヲ響リ杵ヲ漂シ方斛
ノ腥血ヲ以テ明治人昭代ヲ汚穢シ尔後更迭ヲ
ル毎ニ在暴ヲ以テ習例トテ佛國同一般ノ門
戸ヲ開ク事ナキハ惡結果ヲ求メハ昭々手トシテ
業已ニ眼前ニ在ルカ如ク嗚呼先リ之カ豫備ヲ
誠ニ之カ序次ヲ始メテ然後國會ヲ開設得テ言テ

ハキナ其封鎖トシテナキナキハ八景畫ノ如ク
何ヲカ之カ豫備ト謂ヒ何ヲカ之カ序次ト謂ヒ
乎國會ヲ起ス先キ第一ニ民法ヲ編シ其所有
ノ權利及婚ノ法式ヨリ家督相續及ニ契約等ニ
至ル及々相互ヲ關シ須臾長缺ク可クテ其ルカ法
則及ニ行政區域行政裁判又ニ訴訟法又ニ商法
會社法等凡成規ヲ明指シ法律ハ區域ヲ出テテ
之ヲ自由ニ生息優游スル事ヲ以テ恒ニ人民ノ腦
底ニ感深キ事トシテ斯ノ如クナキハ好テ法律
外ニ跋扈陰謀又ニ惡習ヲ漸ク除テ得ルニ至リ他



自憲法ヲ制定スル際法國會議員ノ選被選及
其其他諸權利ヲ撰定スルニ於テモ多少硬軟
ル所中由一也民法既ニ定レバ則チ憲法ヲ制定
増減主宰政府及人民ノ權限ヲ判然明畫シ即チ基
礎定リ經營竣ル所然原始チ國會ヲ開設スル事
主リ是レ也又豫備ト意定是如之ヲ序次ト言フ
世非議者或ハ言フ先チ國會ヲ起ス之ヲ據テ以
テ憲法ヲ制シ民法ヲ議スニ百奉僕大ニ其説ヲ
述スルヲ見テ蓋シ民法ハ人生須臾ニ缺ク可
スレテ其性微妙ナルモノナレハ衆囂々タル鳥

合ハ議會ニ付テ其討論也ニハ決シテ完然
無美果ヲ結ビ得其精也人知テ亦不テ此証左也今
日ニ地方官會議又ハ府縣會ニ於テ其歴史ヲ外ルニ
テテスヤ殊ニ況ヤ王室政府人民ノ權限ヲ區畫
スル如キ国家最大最重ノ憲法ヲ其議ニ附ス
ル出於テテテ故チ民法ト云フ憲法ト云フニ
底命令其出ルル者テテ其選ニ完美澤ヲ
期ス可テテ也士西邦中ニテ對テテニ百員
今僕ノ思考スル所ニ據テ民法ヲ編シ憲法ヲ定
テ一ニ破テテテ即チ一也日月對テテニ據テ

第一元老院ヲ廢シ別ニ他日民撰議院ニ對抗
スルニ足ル上議院ヲ設立スルニ議院ニ對
第二其議員ハ華士西族中ヨリ撰拔シテ一百員
ヲ限ル其全員ハ幾許ハ公撰ニ附テ若干ハ教授
ニ出テ下ニ但平民民衆ニ學術ニ衆ニ秀リル者
或ハ國家ニ大勲勞ヲ居者ハ教授ヲ以テ命ズル
下下ルニ其ハ必ク皇室如欲八月ノ蘇別ニ畫
第三其議定ハ年々件ハ歲出入豫算ヨリ凡百人
制度法律ニ其其權限ハ從來元老院ニ附與セ
云々爲會リテ層判然明畫スル所ナレ一ニ議院

第四民法ヲ編ニ憲法ヲ制スルニ參事院
國一任セズ別ニ内閣ヲ凡若干委員ヲ以テ之
ヲ調整シ而後議院ニ議決セシメ然レテ事實
ニ適セザル中又ハ議論ニ主義以上ニ議院ハ
時社ニ天皇陛下ノ裁決ヲ仰ク一ニ但民法ハ務
テ皇國古來ノ風習慣行ヲ採ル其未ク足ラザル
部テハ或ハ條理ニ基キ或ハ他國ノ良法ヲ酌
取テ一言(現今太政官)於テ民法編纂局ヲ設置
下リ書畫馬概不佛人民法ヲ按萃スル皆過非不
何ヲ以テ完美ナル我民法ヲ編纂スルヲ得ルヤ



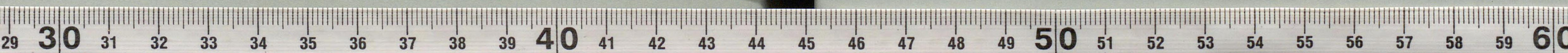
抑又何ノ國ヲ問ハ本自ノ習慣風俗ヲ示シ此ハ
ナリ習慣風俗ハ即チ所謂民法ナリ又習慣風俗
所外ニ曾テ民法ナリ但テ我國ナリ其未更
成文法ヲ示シ此ハ即チ所謂民法ナリ其國
從是各殊異ナリ若シ他國ナリ成文法ヲ
採テ之更我ニ民ヲ施シ此ハ即チ所謂民法
良法ヲ模型トシ此ハ即チ所謂民法ナリ其國
ナリ其如キ誤謬ナリ其實ナリ其甚ナリ且憲法
國ノ習俗ナリ成文法ナリ民法ヲ基礎トシ此ハ
者良憲法ト稱ス憲法ヲ以テ民法ヲ撰定最先

注意セ知ル所ナリ是即チ本文故ナリ民法編制
方ヲ既知所以ナリ當ニ此點ニ本ニ示シテ
第五議院ノ憲法ヲ暫ク命令ス以テ依法與テ
他日民法成テ憲法ヲ制定ス此際ニ之ヲ改定
ス一ニ審衆置ク此下議院ニ開設ヲ待テ之
附テ可テス此ハ即チ所謂民法ナリ其國
羨ニ之ニ概言ス此ハ即チ所謂民法ナリ其國
下欲セ此則チ政府ノ組織ヲ工變シ政策ノ據
此所ヲ確定セ此ハ即チ所謂民法ナリ其國
此ハ即チ所謂國會更起ス若ク是ハ即チ所謂國會更起



スハ則チ先少憲法ヲ定テ在リ憲法因定ル
則チ先少民法ヲ編スルニ在リ民法ヲ編スルハ
則チ先少元老院ヲ廢シテ別ニ上議院ヲ設ル
在リ即チ僕等今日ヲ以テ國會ヲ起シテ時ト
ナスモハハ世人ノ以テ時トスルモノト異ナリ
世人ハ皆曰ク今ヤ人智既ニ進開坊ニ參政ヲ望
ム宜ク其輿論ニ從テ國會ヲ起シテ天地ノ公
道ニ歸テ一憲法僕等以為今ヤ幸甚輿論ヲ
國會ニ歸尚スルヤリ當ニ此機ニ乘シテ之ヲ開
キ以テ明治政府ノ基礎ヲ鞏固ニシテ益昭代

ノ治化ヲ翼參ス一ニト僕此論ヲ胸臆ニ藏スル
茲ニ年アリ既ニ今春内閣ノ改革アルニ臨ニ則
チ閣下ニ其大畧ヲ口陳ス然リト雖以妄ニ之ヲ
吐露センカ或ハ恐ル所謂民権黨ノ譏ヲ招カシ
トヲ之ヲ黙シニ付シ去シ乎國家ノ前途益困難
ニ迫ルヲ如何セン頼ニ閣下憂國ノ深キ愛民ノ
厚キアリ遂ニ僕等滿腔ノ熱衷ヲ吐露シテ
以テ万一ヲ裨補セシメントスルニ至ル幸ニ閣
下從今一層深ク意ヲ此ニ盡シ僕等衰懷ヲシテ
閣下憂國ノ深情固共末世ニ擴充スルヲ得セシ



行ヲ開キ結社ノ業ヲ盛ニスルカ若キハソ以テ
農本ヲ厚クシ工業ヲ勸メ商賈ヲ勵シ國ヲ富シ
本ヲ厚クスルノ方略ニ於テ悉サ、ル處ナシ加
フルニ陸海軍ヲ皇張シ内ヲ鎮シ外ヲ禦クノ方
策亦盡サ、ルナシ蓋シ西歐諸國文明ヲ以テ自
ラ誇稱スル者ト雖モ其大節目ニ至テハ亦此ノ
如キニ過キス唯我邦八年所尚淺キカ為ニ未タ
精熟ニ至ラサルニ夫レ政府ノ施設區畫布置
スル所此ノ如シ而シテ退テ諸ヲ民心ニ徵スル
ニ及テ此因由ニ外ナルノ結果ヲ致ス者ハ抑亦

何^レ今ヤ民心ニ歸向スル所ヲ察スルニ政府
ヲ奉戴セサルナリ政令ニ甘服セサルナリ動モ
スレハ猜疑ヲ抱クナリ夫レ上ノ執ル所其因由
此ノ如クニシテ下ニ顯ハルニ其結果彼カ如
キ者ハ抑亦何ソヤ朝廷ニ在テハ施設區畫布
置スル所皆以テ民生ヲシテ富厚安樂ナラシム
ルノ外ニ出テス未曾テ一点ノ私意斯民ノ障害
ヲナス者アルナシ然リ而シテ民心感戴セス
反テ睽離ノ色ヲ顯ハシ猜疑已マサル者是尋常
ノ道理ヲ以テ理會ス可ラサル者ナレハ今ニ逮

テ深ク其因由ヲ究ムヤル可カラズ蓋シ維新ノ
業ハ偉且盛ナリト虽モ其成ルヤ漸ク依ル者
非ス漸ク依ラサレハ日暮道遠キノ患ナキヲ能
ハスシテ間々急進疾驅前後錯置ノ宜キヲ失ス
ル者アリ是其一也維新ノ盛業ニ因テ旧染ノ汚
俗ヲ一洗シ治教休明ノ美ニ馴致シタリト虽モ
事大率ニ外形ニ止リ終カニ革面ノ域ニ上ルモ
未タ豹變ノ効ヲ見ズ是其二也維新十二年間ノ
施設スル所大ニ旧慣ヲ廢シテ新法ニ循テ故ニ
其間因テ以テ幸福ヲ得ル者アリト虽モ又因テ

以テ産ヲ失シ業ヲ墮シ治路ニ迷フ者鮮シトモ
之即士族ノ若キ者トシ此点ニ中ル者ニシテ農
高ノ若キ者トモ回来豪富ト稱スル者今日ハ則窮途
ニ悲歎スルノ輩指屈スルニ遑アラズ是其三也
維新以来海外ノ法制ヲ模倣スルヤ天下翕然ト
シテ法律ノ以テ社會ヲ維持スヘキヲ知ル而シテ
道德習慣ノ真ニ以テ社會ヲ綱紀スヘキハ一切
ニ之ヲ忘却セリ凡ソ此弊風ノ煽揚スル所其害
蓋シ一ニシテ足ラス少年子弟ノ斯ニ觀化スル
ヤ内ニ在テハ父兄ヲ輕侮シ外ニ於テハ長上ヲ



薄視スルニ至リ乃師弟の間如キ反テ雇人ヲ
以テ師ヲ遇スルノ状アリ況ヤ風俗ノ濇薄ニ趨
クニ付テ財利ノ事競ヒ起リ禮義之ヲ爭ヒ錙銖
之ヲ較スルニ於テヤ加之海外自由説ノ人口
ニ膾炙スル傲慢自肆ヲ錯リ認メテ真個ナル自
由ノ主義ナリト云故ニ自己一人スラ身ヲ律シ
事ヲ幹スル丁能ハズル者ニシテ官吏ニ抗論シ
尊長ヲ凌轢シ未自ヲ得色スル者アリ蓋シ彼ノ
忠厚惻怛上ヲ愛言人ヲ恤然レ情ハ掃地ニ墮テ
浮躁倫薄ノ風業般習俗ヲナス亦何シ禮義廉耻

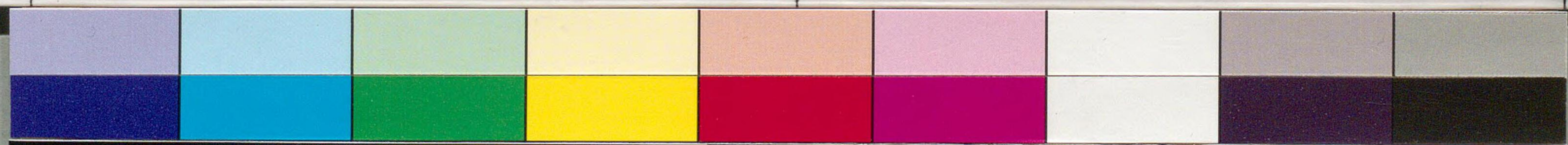
ヲ之レ論セシヤ是上令ニシテ然レテ之レ所
非スト虽法律ヲ以テ把持スルノ弊漸ク爰
及テノニ履霜誠ニヤレハ堅氷將ニ至ラレトス
是其四也凡ソ此數ノ者ハ前ニ所謂民心ノ歸向
政府ヲ奉戴セズ政令ニ甘服セズ動モスレハ猜
疑ヲ抱クノ源ヲナス者ニ非ルハナシ故ニ外形
ニ就テ之ヲ觀レハ政令ノ因由一モ以テ此結果
ヲ致スヘキ者ナキモ其内實ニ就テ之ヲ察スレ
ハ豈果シテ因由ナレト謂フヘケシヤ然レモ此
數ノ者ノ因由タル豈亦己ノ可クシテ己ニサレ

者ナリシヤ是皆事勢ノ必然ニ出ル者ニシテ所
謂利害相依也由テ拳クハ他ノ一亦從テ来ル
者ナリ然リ而シテ維新ノ盛業ハ幸ニ聖徳ノ
洪大ナルニ由リ中間難事ナキニ非サルモ尚今
日ノ太平ヲ保スルヲ得ルハ夫征韓ノ紛紜
如内閣殆離乖タルノ姿知至リ祭ニテ佐賀ノ
役上ナリ山口ノ變トナリ遂ニ十年西南ノ大乱
トナリ而シテ中間臺灣ノ事件ト朝鮮江華灣ノ
事件トヲ以テ兵革ヲ動かシタル四回ニテ動
カサシムルニ息具ル者一也總テ此等ノ時ニ當

リ民心ノ歸向一ニ中央政府ニ在ラサルヲ以テ
後顧傍慮事タル皆容易ナラザリキ然ルニ幸
ニ聖徳ノ隆盛ト廟議ノ確定トヲ以テ僅カニ能
ク功ヲ奏シタルに豈始ヨリ泰山ノ動カス可カ
ラサルカ如キヲ以テ能ク之ヲ制壓シタル者ト
謂フ可レヤ然リ而シテ今日ニ至リ民心ノ歸向
政府ヲ奉戴セズ政令ニ甘服セズ動モスレバ猜
疑ヲ抱ク者ハ依然トシテ旧日ニ異ナルナリ
熟々今日ノ形勢ヲ察スルニ之ヲ内ニシテハ民
心睽離ノ状ヲ顯ハシ之ヲ外ニシテハ隣國ノ関

係新條約ノ改正ナリ故ニ今日ニ在テ因政事
機軸ヲシテ鞏固ナラシメテ其ルハカラス之ヲ
行フハ法ヲ行議法ノ三權ヲシテ鼎立擴張釐正
スルヲ以テ急務トス若シ然ラズシテ一旦不虞
ノ變アルニ遇ハ再ヒ顧慮スル所ナルハ必然ナ
リ況ヤ此風ノ漸スル所朝威漸少輕ク在上者敬
戴スル志念漸々減シ政府亦徒ラ怨讟ヲ府
トナシ止ラズ不慮テ竟テ臣子ノ言ヲ聽忍ヒテ
ル者アルニ至ルモ亦測ル可ラズ是臣力以テ深
ク患トスル所ニシテ寧日杞憂ニ屬スルモ亦越

俎言ナキヲ得サル所以ナリ夫レ政ヲ為ス者
ノ民心ヲシテ政府ニ歸向セシムルハ事必シモ
新奇ニ出テス只尋常人士ノ恒言ノ所ヲシテ
適切ニ之ヲ行フ外ナラス即チ國憲ヲ確立ス
ルニ在ルハニ政府亦茲ニ見ル可クアリ明治九年
某月元老院ニ下シテ國憲ヲ草セシムルノ詔以
テ見ルハニ是宜シク早晚制定ニ至ルハキ者ニ
係リ其事タル亦容易ナラス夫レ國憲ハ天下制
度ノ綱紀依テ以テ確立シ之ヲ萬世ニ垂レ後世
聖子神孫斯民ト共ニ之ヲ守テ勤カス可ラサ



ル元極タル者ナレバ固ヨリ一朝一夕ハ制定ニ
成ルハキニ非スト虽此時ニ及セテ略其綱領
決定ス内閣樞機ノ政ト諸官省ノ權限モ之ニ依
遵シテ以テ違フナクハ廟謨ノ方向モ自ラ
決定シテ民心ノ歸向ヲ得ルモ亦期スハキナ
允憲法ノ中ニ皇統一系ノ苟モ犯贖ス可ラサル
ヲ叙スル等ハ典固ヨリ論ヲ待タズト虽此今日
存在シテ既ニ地券ヲ下付シ土地所有權ヲ以テ
之ヲ人民ニ付與セタレバ於テハハ事ハ
皇室享クル所亦限量ナキヲ得ス享クル所已ニ

限量ナル時ニ皇室ノ私庫私幣私有モ從テ別
置セサルヲ得ス是勢ノ必ス至ル所ナリ又親王
及禄制ノ若干モ從テ其制ヲ立テサル可ラズ况
テ法令ノ條款之ヲ頒布踐行シタル明哲疑ナキ
者之ヲ集録シ之ヲ政府ノ行政ニ徵シ之ヲ議院
ノ權限ニ照シ之ヲ司法ノ判決ニ視且各部ノ庶
政ニ考フルモ首尾相合ニ左右源ニ違フテ齟齬
扞格ノ患ナキ者之ヲ宣布シテ國民ト共ニ之ヲ
遵守スルニ足ルハキヲヤ如此者ハ必ス之ヲ難
事ニルニ非ス而シテ行政議政司法ノ三權分立



スルル今日ニ在テ略其規模ヲ成セリト虽此一
層之ヲ嚴正シ其區域ヲ定メ行政權ヲシテ他
ハ一權ヲ掣肘スルコト下カテハ亦以テ之
ヲ憲法ニ載セテ矛盾スル所ナカルニ如此者
ハ一朝一夕ノ能ク辦スルキニ非スト虽此心誠
ニ之ヲ求メテ之ニ數年ヲ假ヤハ漸次ノ經驗ニ
因テ至當ノ地位ニ達スルニ唯尤モ至難タルハ
君民兩權ノ制定ニ在リ故ニ維新ノ誓文ニ基ク
キ竟ニ明治八年長門ノ上ニ至リテ漸次ノ大變ニ
聖詔ヲ下シ漸次立憲ノ政體ニ馴致セシトス於

是比年地方官會議ヲ開キ今年ニ至リ府縣郡區
長會ヲ開ケ以テ是事ノ緒ニ就ク者ニ之ヲ從來ノ
目的ヲ達スル順序ヲ得タリト謂フニ此事既ニ
斯ニ至ル以上ハ一躍シテ民會ニ及ブニ誠ニ其
當ナリ然レモ所謂民會ハ即君民ノ權ヲ分割ス
ル所ニシテ至要至大固ヨリ府縣會ノ比ニ非ズ
ニテ又且稍其旨趣ヲ異ニスル者ナリ故ニ此典
ニシテ奉行ニ就カハ國憲制定ノ頭腦ニ作ルカ
如ク其他ノ支部ニ至テハ固ヨリ難事ニ非ズ夫
レ民會ハ此ノ如ク至重ナシハ其起立モ亦容易

二為不可ラス最以テ慎重ヲ加ヘテ此可カサル
此者又ハ然レモ今日ノ形勢早晚斯ク至ルヤ
ヲ得ヤ否トタルハ智者ヲ待タズ以テ知ル所
ナリ臣有明竊以爲久ク事ハ此ノ如ク至重
至大ニシテ勢已ニ可クヤル者ナリト雖モ樞機
ノ関スル或ハ及テ大禍ヲ惹クカ慮アル者ニ於
テハ亦宜シク聲言ヲ先ニセテ其實行ヲ先ニス
ルニ暗ニ其實ヲ行フテ實驗ニ徴シ擇格齟齬ヲ
患ナキ時ハ始テ其名ヲ更メテ之ヲ声言スル
亦晚ニ此モ不故也今開計ヲ爲スニ特撰議會ヲ

開クハ蓋シ方今政略上ニ於テ策ノ得タル者ナ
リ夫レ特撰ナルトキハ其智ニシテ賢ナルヲ撰
ニテ之ヲ撰拔スルコトヲ得レバナリ今幸ニ既
ニ府縣會ノ設立アリ其中巨擘ノ者ノ如キハ何
レノ府縣ニ於テモ見易ク知リ易キ所ナリ故ニ
此等ノ人其徳識アル者ヲ撰テ之ヲ以テ一ノ議
會ヲ開キ先ツ國憲ノ條件ヲ議セシメ併セテ天
下立法諸種ノ事項ニ涉ラシメ之ヲ數年ノ經驗
ニ試ミテ果シテ以テ立法ノ大權ヲ寄スルニ足
レリトセハ其時ニ至リ變テ民會トナシモ可

十リ(或ハ特撰議會又名ヲ設ケテ府縣會中ニテ
投票ヲ以テ二三以員ヲ撰ニテ其議會ヲ設置ス
ルモ其直キニ從フ一也又已ニ經驗ヲ試ニテ其
會名撰撰ノ法ニ參倍錯綜諸歲月ヲ以テ民會
トナスモ亦可ナリ如此議會ニ固ヨリ始ヨリ民
會ノ名ヲ假キテ其集合解散ノ權初ハ猶政府ノ
手ニ付合而シテ其議決ハ其所以必行ノ事ト也
又ト定ムル所然ルトキハ或ハ白ハシ是拾モ
リ元老院ヲ置クカ如ク其議決ニ官祿諸費ヲ倍
スルニ似タリ今ト是言極メテ理アリ然レモ元老

院ハ皇族官吏ト四兵等以上ト年ハ由人材ヲ待
テ會所トシテ此議會ハ各府縣會リ其會中ニ五
歳以上ト至ル人材ヲ待ツ其新上ト亦全ク
同体ハ者タルトセズ況ヤ其議決ニハ其
朝廷心誠ヲ求メテ其後來竟ニ民會ニ變セ
トナルハ目的ニ於テハ或固曰ク此ノ
如ク權限ハ狭小ニテ其議會徒ラニ政府官
吏ノ意ヲ諛從ニテ事益ナキカ若シト是亦然
テ不何カ下ナ具ハ西歐各國ノ人民ハ喙ヲ國政
ニ容ル權アリト虽モ我邦ヲ以テ今邊カニ西歐



各國比較之ヲ觀ルハ誠ニ其萬一ヲ望
可ク不唯方ニ是ヨリ中絶ノ端緒ヲ開ク
夫レ豈豈概ニ事ニ益シトシテ之ヲ幹
ニ非ズト云ハ者アラズ然レモ是固ヨリ政
ニ非ズ事ヲ慎重ニ以テ誠意ニ出シテ
正經ハ其天以テ之ヲ利害ヲ顧ミサル者
議事苟モ真ニ其利ヲ得ルハ是即正經
議會所以テ後來確乎ニ其民會ヲ起シ
天不意大憲法ニ其節目ヲ如キハ固
事

悉スニキニ非ズ然レモ此方略ニ因テ民會モ漸
次ニ成立シ憲法モ從テ確立スルニ至ルハ前ニ
陳テ其所以民心ノ政府ヲ奉戴スルニ其服
セザル動モ不レハ猜疑ヲ抱クハ三患將ニ醫癒
淋就テ縱ニ變動スルモ民心ヲ顧慮スル患ナク
即チ是是臣區々大心杞憂ノ至ニ堪ハス
即チ陛下力ヲ為スニ之ヲ言ハレト欲スル所ナリ
抑臣力縷述スル所以若ク唯政略ノ活動ヲ以
テ機會ヲ運轉シ實際適切ニ之ヲ行ハレト欲ス
ルハナリ然レモ亦咄嗟ニ能以辨スル所ニ非ズ

レハ之カ為ニ若キ如時日有與蘇甘ル可ラ非ル
者蘇會之良要ニ實則先後緩急中派ニ唯十歳ニ
聖詔ヲ趣意ヲ貫徹以テ民志ヲ救攬政略以
順序ヲ得也哉大ニ欲テ外ヲ然レテ
他ノ良法莫ク以テ民心ヲ饜足スルニ至ルハ
術途ヲ幾ク變遷亦何ヲ為言ハ蘇熱心也臣以
テ陛下ヲ為ニ謀議所外者ハ亦前文ノ外更
刺念慮所存心ト知臣是處發忘譯ヲ顧令ス極言
必テ此迄至意斯以テ有難有胡謹テ啓スハ商ニ
悉スハ一ニ非ス然レテ此六歳ニ因テ月會ヲ漸

山縣參議建言政體之件

明治十五年
五月

臣有朋 竊カニ方今天下ノ大勢ヲ察スルニ
陛下未タ枕ヲ高フシ玉フノ日ニ至ラサル者ア
リ客歲十月詔ヲ下シ明治二十三年ヲ以テ國會
ヲ開クノ期ヲ立テサセ玉ヒシヨリ彼ノ國會願
望者ハ既ヲ絶フト虽臣又繼クニ政黨組織ノ喧
囂ヲ以テス是固ヨリ理勢ノ然ラシムル所激シ
テ以テ斯ニ至リ已ム可ラサル者アリト虽臣亦
充耳以テ相待ツヘキニ非ス有朋 其徒ノ論辨言



談スル所ヲ聴キ唱和雷同スル者ヲ察スルニ率
亦少年客氣ノ子弟ニ過キスニテ空理膚淺ノ談
ニ非サルハナシ即チ一二老練ノ士アルモ徒ラ
ニ之カ爲メニ推戴セラレ悉ク其意ノ欲スル所
ナラサルモ之ヲ制スルヲ能ハス遂ニ騎席ノ勢
ヲナス者ニ似タリ中或ハ巧思アルノ徒ニ至ラ
ハ此等少年子弟ヲ鼓舞シ以テ聲氣ヲ博シ以テ
爪牙トナシ在上ヲ祀サントスルモ亦無キヲ保
シ難シ今天下ノ勢ヲ觀ルニ滔々トシテ演説ニ
結社ニ誹議ニ虎論ニ徃トコロトシテ之ナキハ

山本製(十)

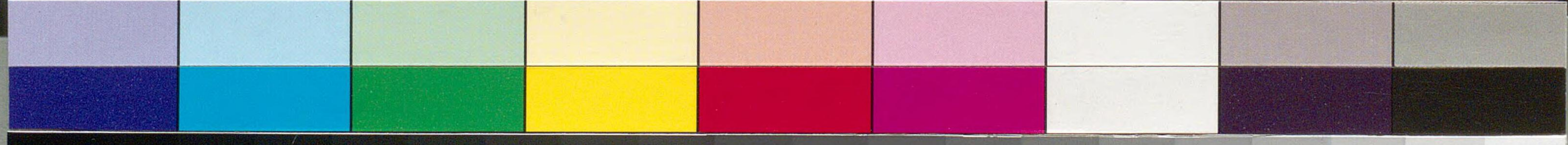
ナシ浮誕輕躁以テ相激動ニ喋々呶々以テ相馳
逐ス主義ト唱ヘ權利ト稱スルモ真ニ一場膚淺
ノ詭譎ニシテ漫ニ衆聽ヲ聳カスニ過キス顧テ
此等ノ徒カ其身ヲ行ヒ其家ヲ管スル所ヲ察ス
レハ徃々貧苦自立スル能ハス心既ニ檢束ナク
行亦儀則ナシ徒ラニ自由ヲ以テ自ラ目スト虽
比一事務ヲ管シ一窮苦ヲ極フコトダモ能ハサ
ルノ徒多シ嗟呼此ノ如クシテ已ラス何ノ底止
スル所アラシ且夫レ各縣各地蓋シ老實ニシテ
稍識見アルノ徒ナキニアラシ然レ比時風ノ煽



少所世運ノ迫ル所縦ヒ之ヲ腹誅スルモ之ヲ面
年スル能ハス反テ老頑固陋ノ指目ヲ受ケ黙シ
テ止ムノト然リト虽也天下ノ勢此ニ馴致シ夕
ル者亦豈一朝一夕ノ故ナラシヤ夫レ維新ノ際
一旦ニシテ社會ノ秩序ヲ蕩盡セリ蓋シ當時ノ
政略此ノ如クナラサレハ彼ノ舊慣世習ノ人心
ニ固著スル所謂舊深汗俗一新ヲ見ルノ日ナケ
レハナリ然リ而シテ一旦此旧秩序ノ蕩盡ニ就
キタル隨テ之ニ受クルニ新秩序ヲ以テスルコ
ト無ケレハ宜ナリ理勢ノ此ニ至ルヤ夫今日ノ

山本製(十)

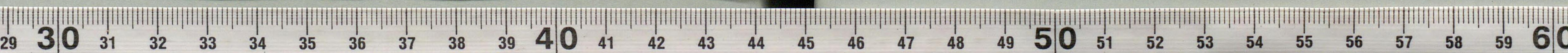
論壇ニ立于誘掖開導ノ任ニ當ル者ハ即チ旧秩
序ノ地ヲ掃ヒタル後ニ在テ教育ヲ受ケ世路ニ
就キシカ故ニ偏ニ英佛ノ餘響ヲ耳ニシ僅ニ歐
亞ノ現況ヲ目ニシタルニ過キサレハ宜ナリ我
カ東洋治乱興廢ノ故ニ暗キヤ宜ナリ論スル可
動モズレハ方柄圓鑿ニ出ソルヤ況ヤ本邦人民
ノ性質熟慮ニ長セスシテ輕舉ニ速カニ模倣ニ
易キヲヤ何ソ況ヤ近日膚淺輕躁ノ徒ヲヤ安ソ
其深識遠慮治乱ノ故ヲ審カニシ反覆論究真是
ノ処スル所ヲ明カニシ以テ政治ノ方向ヲ定メ



綱攀リ目張ルヲ致スノ略ノ負フコトヲ望ムハ
ケンヤ然リ而シテ此徒々ラニ放言横議唯自己
ノ唱フル所ヲ擴張シテ世人ノ信徒ヲ顧ミカレ
ハ此ノ如クニシテ猶止ムヘシト虽目下ノ形
勢ニ乘シ駿々乎トシテ巴ムフトナシ苟モ控御
檢束ノ術ヲ施スナカラニカ乃チ世運ノ関スル
所國家盛衰興廢ノ機斯ニ存スル者アルヲ如何
セニヤ夫天保弘化年間ニ生じ世故變遷ニ遭遇
シ經歷アルノ徒今ヤ漸ク衰退ニ就キ行々將ニ
進ヲ社會ニ絶タントス而シテ継テ興ルノ後進

山本製(十)

ニシテ乃チ此ノ如クナレハ其今後ニ恃ム所ノ
者將ク如何ナルヘキヤ是殊ニ世運ノ為ニ慨嘆
スヘキ所ナリ故ニ狂瀾ヲ未倒ニ回一スノ政略
唯此時ヲ然リトス今ニシテ之カ策ヲナサバレ
ハ他日臍ヲ噬モ何リ及ハシ此等新陳交代ノ時
ニ在テ其最急トスル所ノ者ハ唯教育ノ一術ニ
在リ而シテ頃来文部ノ政令モ亦頗ル茲ニ監
ル所アリテ區畫其方ヲ得ルニ至レリ尚今後漸
次改良ニ赴カント是レ有朋カ切望スル所ナ
リ然レ此此事タル年月ヲ積ムニ非ナレハ其効



ヲ見ル能ハサルハ固ヨリナリ況ヤ今日中ノ學
ノ児童少年ニ於ケル縱令良材偉器ヲ輩出スル
モ今日ヨリ二三十年ノ後ニ非サレハ其供用ニ堪
サルヲヤ然リ而シテ目下ノ急需近ク八年ノ内
ニ在レハ即此急需今日ニ在ル知ル一ニ夫八年
後ノ豫備ニ至テハ朝廷已ニ歐洲ノ派遣アリ
今ヨリシテ八年ノ星霜ヲ積ムハ其精確ヲ極ム
ル必ズ餘裕アルヘシト虽氏猶一ノ目下ニ急ナ
ル者アリ古ニ曰ク文武ノ政ハ布テ方策ニ在リ
其人存スレハ其政舉リ其人亡フレハ其政息ム

山本製(十)

ト今歐洲派遣ノ目的ハ即方策ニ在ルノ政ナリ
縱令之ヲシテ其精確ヲ極メ金科玉條一點ノ瑕
疵無ラシムルモ之ヲ行フハ生活的ノ人ニ非サ
ルハナシ乃チ上未論スル所ノ如キ人材此ノ如
キノ風習此ノ如キ政黨ヲ以テ果シテ能ク成
スアルヲ望ミ其金科玉條ヲ運用シテ果シテ能
ク藩廬ノ地ニ生スル如ク其レ易々タラシヤ是
木ニ縁リ魚ヲ求ムルノ類ニ非スニテ心カヲ盡
シテ之ヲ為シ後必ス尖アルノ類ナリ故ニ今日ノ
人ヲ以テ其政ニ従ハシムル之ヲ英米ニ比スル

猶其方一ヲ廢幾スヘカラス強テ之ヲ為サント
欲セハ是所謂虎ヲ畫テ成ラズ及テ犬類スル者
ニシテ雷同喧嘩ナル幾ハクカ彼ノシヤコソビ
シノ徒タラサランヤ是尤寒心スヘキ事ニシテ
豈手ヲ束ネテ之ヲ待ツヘケレヤ有朋熟々之カ
為メニ謀ルニ此狂瀾ヲ挽回スルハ唯大ニ政綱
ヲ振起スルニ在リ夫レ政ヲ為スノ道ハ恩威寛
嚴並ニ行ハレサル可ラズ然レモ國ノ慣例ニヨ
リ世ノ變遷ニ從ヒ万国畫ク同轍ニ出ツルコト
能ハスト雖モ其大綱ヲ擘ケテ之ヲ大別スレハ

山本製 十

要スルニ寛嚴二途ノ外ニ出テス其所謂寛ナル
者ハ事物ヲ檢束セス其自治ニ放任シ國家ノ成
規アル者モ猶之ヲ民間ノ慣例ニ付シ遂ニ外ニ
シテハ郡區長大ニシテハ知事令ノ官選ヲ廢シ
更ニ進テ政黨ノ首領ヲ以テ内閣ヲ組織セント
スル者ナリ其所謂嚴ナル者ハ之ニ反シ内閣ハ
屹然トシテ政黨ノ外ニ立テ三大権ノ大綱ヲ總
括シ民心ノ適度ヲ計リ社會ノ秩序ヲ正シ法律
規則ヲ密ニシ其不完全ナル者逐次ニ之ヲ増補
シ人民ヲシテ政府ノ主義ヲ知ラシメ其方向ヲ



シテ敢テ惑フナカラシムル者ナリ寛嚴ノ別大
要此ノ如シ有朋方今ノ政治ヲ察スルニ七八年
以来或ハ緩漫ニ失スルノ姿アル一日ニ當テ之
ヲ振起スルニハ宜シク寛ク用スベキカ將タ之
ヲ嚴ニスベキカ意フニ維新以来政綱大ニ振フ
ト虽氏顧ルニ社會ノ秩序ヲ蕩盡シテ民ニ自由
ヲ假スモ亦已ニ至レリ蓋シ一旦ニシテ束縛壓
制ノ政治ヲ解キ之ヲシテ自由ヲ得セシム其反
動反テ測ル所ニ過クル者アリ猶鐵圈ヲ出ツル
ヲ得ルノ極歎逃走ニ出ラスニテ却テ搏噬ヲ逞

山本製(十)

シクスルカ如シ故ニ今ハ時ニ當リ弛緩ヲ矯ム
ルハ張急ナラザルヲ得ズ而シテ張急ヲ務ムル
ハ政令畫一ニ出テ管束嚴正ナルニ在リ然ルニ
世人動モスレハ輒チ曰ク政ハ寛ヲ尚フト夫レ
然リ然リト虽氏今ノ政黨社會ノ所謂寛ナル者
ハ只法網ヲ逃レ規則ヲ破リ甚シキニ至テハ放
言横議ニ以テ政府ニ抗抵ニ秩序ヲ紊乱ニ禮節
ヲ破壊ニ法律ノ範圍内ニ在テモ尙其畛域ヲ超
ユル者ヲ誤認シテ自由自治ノ民トス而シテ政
府之ヲ不問ニ付スレハ目シテ公平ノ政治トナ



ス是豈真成ノ自由ナラシヤ豈真成ノ自治ナラ
シヤ是緩漫ノ弊ナルヲ今之ヲ救正セント欲
セハ束縛ニ非ス壓制ニ非ス但至當公平ノ法ニ
據リ嚴正明肅以テ之ヲ處スヘキノミ夫レ今日
ノ急トスル所ノ者ハ教育ニ在リト虽比其急需
ニ應ニ難キハ前ニ已ニ明言セリ故ニ今ニ當テ
ハ宜シク官吏ノ職制條例ヲ嚴ニシ各省官吏特
ニ地方官吏ハ為テ現程ヲ立定ニ清廉ヲ務メ
シメ賄贓ヲ戒メ勉勵ヲ促カシ一身ノ行状ニ於
テモ其不品行ヲ戒シ之加為メ懲戒例ヲ嚴

山本製(十)

ニシ各幹式スル所アテジムル是ナリ然レモ此
ノ如ク檢束ヲ行フニハ是ト相對スル法制ナカ
ル可ラス即冗官ヲ沙汰シ又出身若クハ昇級ニ
當テ各自試驗法ヲ立テ廉耻心ヲ養フカ為メニ
退隱俸ヲ定ムル等ナリ此ノ如クスルトキハ監
視官ヲ立テサル可ラス此監視官ハ殊ニ之ヲ設
クルヲ要セス即交互監視ノ法ヲ用エシ警一ハ
各縣ノ警部長ヲ直ニ内務卿ニ隸シ一ハ縣
令ヲ輔ケ警保ノ事ヲ掌リ一ハ縣令ヲ監視シテ
直ニ内務卿ニ具申スルカ如シ司法官吏モ亦之



ヲ司法卿ニ具申セシム一ニ而シテ其警察官ヲ
監視スルハ地方長官ノ任トシ率不交互監視ニ
テ以テ相牽制スルヲアラニシメ此ヲシテ徒法
ニ屬セサラシメハ則私心随テ生スルコトヲ得
ス苞苴随テ開クヲ得ス諛諛随テ起ルヲ得ス而
シテ政迹上ハ自カラ公平ニ赴キ人民モ亦信ヲ
官吏ニ措クニ至ラニ官吏ニシテ人民ノ信用ス
ル所トナラハ則彼ノ喋々歎々タル者縱令今縁
万吻アリト虽比何ソ之ヲ顧ミルニ足ラニヤ如
此セハ或ハ曰ハシ警察官ヲシテ其長上ヲ監視

山本製十

セシムルハ是例行ノ嫌ヒアリ不可ナルニ似タ
リト有朋ハ以為ラク此瑣々タル敵ヲ問ヲ用ヒ
スト虽モ果シテ行フ可ラストセハ左ノ一策ヲ
以テ之ニ代ユルモ可ナリ即チ毎年一回元老院
参事院議官ヲシテ各府縣ヲ巡回セシメ政治ノ
如何ヲ極問ニ民間ノ疾苦ヲ查實ニ地方ノ情ヲ
盡スナリ如此官吏ノ法例ヲ嚴ニシ民ノ信用ヲ
得ルヲ以テ第一トナシ其次ハ地方ノ區域ヲ改
正セタル可ラス今全國ニ府四拾一縣タリト虽
モ其間山川ノ區域民情ノ乖異強テ畫一ノ制ニ



従ハシム可ラサル者往々之アリ如此ハ或ハ割
キ或ハ併セ務メテ地理人情ニ適合セシノ郡區
ノ小ナルニ至テモ亦章程規制ヲ立テ適宜ニ之
ヲ改正セサル可ラス其町村ノ如キハ法律内ニ
於テ細事干涉ノ權ヲ解キ其自治ヲ許シ其經濟
ヲ隨處ニ任スルモ可ナリ加之地方ノ經濟ニ於
テ國庫ヨリ支辨スヘキ者ト地方ヨリ支出スヘ
キ者或ハ連帶スヘキ者等ノ分界ヲシテ利然セ
シメ人民ヲシテ疑惑スルコトナカラシムヘシ
夫國會ハ猶八年ノ後ニ在リ歐洲派遣重臣歸朝

山本製 十

ノ後ニ於テ大ニ憲法ヲ立テ百般ノ政治ヲ皇張
セラルヘキハ勿論ナレモ今有開カ陳スル處ハ
目下ノ急務ニシテ八年ノ前即今日ヨリ著手ニ
テ以テ世ノ狂瀾ヲ挽回シ彼ノ國會開設ノ日ニ
當リ聊蹉跎スルコトナク以テ斯民ヲシテ幸福
ヲ得セシメント欲スレバナリ然ルニ上來論述
セシカ如ク政黨組織ニ就テ喧囂紛雜殆ト名状
ス可ラス或ハ人心ヲシテ全ク政府ニ背畔セシ
メントスルノ情況アルニ及ヘリ如是シテ已マ
ナル時ハ知ラス識ラス言フニ恐ヒサル禍乱ヲ



發出セシモ亦未夕測ル可ラサルナリ因テ之ヲ
既往ニ照ラシ之ヲ將來ニ監スルニ今ノ時ハ實
ニ是レ一日モ忽カセニス可ラサルノ秋ナリ近
日府縣會ノ協合セサル官民ノ乖異ヲ來ス者政
党者流ノ教唆ニ歸スル最多トス之ヲ推シテ
而シテ往カハ豈岌々乎トシテ其レ殆レト言ハ
サル可シヤ誠ニ寒心ニ堪ハサル所ナリ此ノ如
クナルトキハ八年間ノ禍乱モ固ヨリ測ル可ラ
ス八年後ノ景況ト虽比亦意想ノ外ニ出ワルコ
トアラレトス故ニ有朋ハ思ヘテ今ニ及テ宜

山本製十

シク早ク世俗ノ所謂寛大ナル政途ニ及ニ嚴正
明肅ノ法ヲ以テ政令ノ大段ヲ改定シ時々ノ景
況ニ應シ法則ヲ伸縮シ務メテ民心ヲ收攬スヘ
シ否サレハ
陛下未夕枕ヲ高クシテ卧シ玉フノ時ニ非サル
ナリ如シ一旦奮然トシテ上條ノ如ク救正ノ法
ヲ施サハ政令畫一疏通ヲ得テ内ハ諸省外ハ各
縣相合シテ猶一身ノ如クナルヲ期ス一ニ允ソ
此救正ノ大本タル緩漫ノ弊ヲ救ヒ以テ嚴正明
肅ノ途ニ就クニ外ナラス大本已ニ定ムルニ至



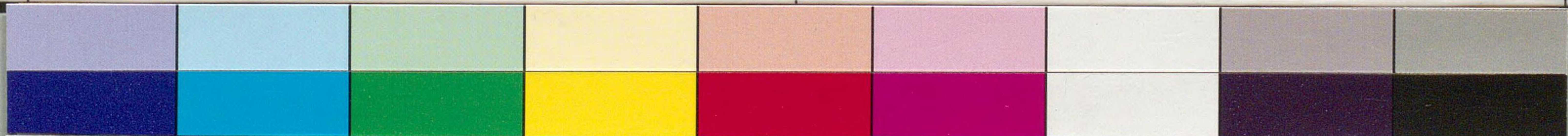
ラハ人心隨テ安スス一ニ然レ其取捨緩急ハ
皆
陛下ニ在テ其議ヲ内閣ニ下シ之ヲ悞議セシメ
事悉ク精確ヲ極ムルノ後ニ非ケレハ不可ナリ
トス謹テ奏上シテ進止ヲ候ス誠惶誠恐昧死謹
言

明治十五年五月

參議山縣有朋

山本製(十)

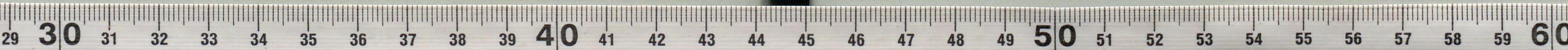
其參議山縣參議意見政府及官吏
國會開設ノ事ハ明治二十三年ノ後ヲ期セラル
ルモノニ今日ノ人民ハ未タ政權ヲ享受ス
ル者ニテ今日ハ今日ノ未タ真成政黨ノ得テ
成立スルキノ時期ニテ今ノ國會ヲ畢竟準備ノ政
黨タルニ過キス故ニ明治二十三年ニ至ル迄ハ
政府及官吏ノ其同主義ナル政黨ニ對スル閣
係ハ資力其他種々ノ方法ヲ以テ間接ニ之ヲ保



護スルニ止ル直接ニ之ニ關係ハ一カラス蓋
政府若シ直接ニ關係スルニ其弊タル第
一政府統御ノ區域ヲ狹隘ニスルニ憂アリ第
二反對ノ政黨ヲ激成ニ其極國會ヲ開設セザルニ
先立紛争ノ餘或ハ意外ノ變ヲ醸成セザルニ測
ルハカラス是故曰政府ノ且ク政黨ノ外ニ立テ
統御ノ道ヲ全クシ一般人民ニ對シ務メテ政府
ノ主意ヲ公明ニシ其同主義ノ政黨ニ於ケルハ
其方嚮ヲ指導シ間接ニ之ヲ保護資助スルニ止
マルベシ 普国ノ制參考別具

山本製 十

普國ニ於テ政府ハ政黨ノ外ニ立ツ然ルニ其ハ政
府ノ大臣ハ政黨中ノ人タルコトヲ得サルヤ
答
普國ニ於テ國ノ宰相ハ政黨ニ從事スルヲ得ル
ヤ否ノ問ヲ受ケタリ右問件ハ法章ノ論ヨリモ
寧ロ事實ノ論ニ屬スベキヲ以テ之カ辨解ヲ為
スハ少シシ難シトスル所ナリ
抑法律ニハ政黨ヲ認メ不憲法亦改進保守ノ黨



派ヲ認メス此ノ國民ハ法章上其持論如何ヲ
論セズ皆平等トスルヲ以テ政黨ニハ權利及ヒ
義務ナシ政黨ニ従事スルハ事實ニシテ他人ト
共言或ハ持論意向ヲ主張スルニ外ナラザレハ
凡ハ何人モ政事ニ関シ其持論ヲ有シ主張スル
ヲ妨ケラル、丁ナシ其各宰相ニ於ケルモ亦同
政事相公政事ニ関シ一ノ持論ヲ有シ公然此持
論ヲ主張シ之ニ従テ事ヲ處シ政事ヲ施行スル
ニ於テ其自由妨ケ能フ者ナシ
然レモ政府ノ事業ハ各民ノ事業ト異ナルヲ以

山本製十

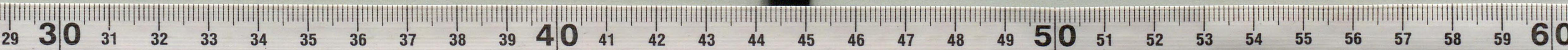
テ政府ノ自由モ各人ノ自由ニ同シカラサル丁
論ヲ俟タズ是レ則チ左ノ論説ヲ主スル所以ナ
リ
普國ニ於テハ凡ソ他ノ立憲帝政國ニ於ケルカ
如ク君主ハ政黨ニ屬セス君主ハ全國人民ノ君
主ニシテ一政黨ノ君主ニアラズ君主ハ諸政黨ノ
上ニ在リテ其時態ニ從ヒ諸政黨ト共ニ國家ヲ
統治スルノ權利及ヒ義務アリ王ハ一政黨ニ偏
スルヲ得ズ何レトナレハ君主トモ政府ノ全權
統一威力ヲ表スルニ政黨ハ臣民ノ持論利益ニ

議院政黨及び
政府ヲ組織スル
制ヲイフ

閣下九閣争分裂迷誤ヲ表スルハ十君主
天法官
議院政府ヲ制スル於テ政黨ハ詞訟ヲ法廷ニ争ハ者
三依テ決定スルヲ以テ多數常ニ理ヲ得ル者ト
五而シテ政黨ノ首領獨リ多數ヲ得タルカ
三獨リ政治ヲ施行スルニ至ル而シテ王ハ議院
ニ對シ若干ノ特權ニ限制セラルルヲ以テ常ニ
多數ニ從ハサルヲ得ス此制度ニ於テハ宰相ハ
政黨中ニ躬ヲ置クヲ得ル而シテ躬ヲ置ク
ヲ要スルナリ自由ニ同ジ

山本製 十

普國ニ於テハ之ト反對スレテ國王ハ實際ニ万
機ヲ親裁シ政務ヲ決定スルニ必ニモ撰挙人ノ
投票ニ依ラサルヲ以テ王ハ時下ニテハ寡數ニ
從ヒ政治ヲ施行スルヲ得而シテ新稅ヲ徴収シ
又ハ新法ヲ制定スルニテガレハ多數ヲ必要
トセス何トナシハ普國ハ政体ニ於テハ君主ハ
憲法ニ於テ撰挙人ノ多數ヨリ更ニ最大ノ權力
ニ附與セラレタルヲ以テ普王ハ多數ノ思望ニ
反對シテ自己ノ思望ヲ行ハシムル得ルハナリ
普國ニ於テハ當代ノ王ノ如キ先王ニ比スレハ



違自由ノ主義ヲ持セラル、所ノ政府ニ於テ
屢々前陳ノ事アルヲ見タリ而シテ嘗テ法ニ背
キ國民ノ意好ニ反シタルノ所行ト看做サレ
ナリ蓋シ普國人民ハ王ヲ統御セラル、ヲ欲
宰相ニ統御セラル、ヲ欲セサレハナリ
普國ニ於テハ宰相ハ國王ノ委員臣僕タルヲ以
テ獨リ王ニ對シテノ責任ヲ有ス故ニ宰相ノ
位置ハ君主ト同一ナラサルヲ得ズ即チ多數ニ
屬セズ又屬スルヲ得ズ何トナレハ政府ノ特
權威力ヲ害スレハナリ夫レ宰相ノ本務ハ王ニ

山本製(十)

勤仕スルニアリテ同時ニ多數ニ勤仕スルヲ要
スルトキハ其本務ヲ限制シ及嫌疑ノ地ニ立ツ
ニ至ラントス故ニ普國ニ於テハ各黨ノ人ニシ
テ宰相トナリタルハ稀ニ見ル所ニシテ設ニ宰
相トナリタルトキハ宜ク其前日ノ位置ヲ離レ
黨派ノ關係ハ是レヨリ除去スベシ否ラザレハ
此要職ニ就クヲ能ハス蓋シ王ニ對スルノ勤ト
黨派ノ勤トハ兩立併行スベカラサルナリ
故ニ普國ニ於テハ宰相ノ政黨中ニ躬ヲ置クハ
憲法ノ精神ニ抵觸スルヲ明瞭タリ蓋シ政黨ノ

一人タルトキハ以テ政府ノ威力統一全權ヲ表
スル可能ハサルナリ
今一步ヲ進メ普國ニ於テハ前ノ宰相則チ辭職
ハ宰相ニ迄及ビシ現在ノ政府ニ抵抗スルヲ以
テ不敬不適法トス是レトト夕ヒ君ニ仕メタル
者ハ職ヲ辭セシ後ト虽モ其本分ハ依然トシテ
遵守スルヲ要スルカ爲ナリ是故ニ普國ニ於テ
ハ冠ヲ掛ケタル宰相ト虽モ政黨ニ從事スルヲ
自由ナラス況レヤ現任ノ宰相ニ於テヲヤ
普國ニ於テハ通例宰相ノ職ヲ辭スルハ或ハ

山本製(十)

退隱或ハ政事ニ関セサル職務ヲ執行ス斯ク
ノ如キ政体ニ在テハ政黨ハ巨大ノ緊要ヲ有セ
サルカユ一ヲ以テ輿論ヲ表スルニ足ラズ其唱
スル所ハ民間ノ流行及ビ競争ノ持論利益ヲ表
スルニ止マル而シテ君主ハ最上ノ審司ナリ國
民ハ王ニ從ヒ政黨ノ首領ニ從ハズ蓋シ政府ハ
偏頗過酷ニ傾クノ恐レアルヲ以テ獨逸國ノ人
民ノ好マサル所ナリ故ニ此種ノ政体ハ永續ス
ル不能ハサルナリ議者以為テク普通撰挙國民
平等ノ議院政府ノ制ヲ許サズ而シテ英國ハ純

然貴族及持權ノ制度アリトテ
普國ニ於テハ投票ノ自由ハ之ヲ保護ス政府
反對ノ投票ヲ為スハ國王ニ反對スルノ投票ヲ
為スニ異ナラサレ氏之ヲ禁セサル所以ハ蓋シ
此レ思想ノ自由ニシテ意智ノ反對ニアラス要
スルニ人民ハ王ノ欲スル所ヲ欲スルモノニ
テ時トシテハ國王又民望ニ從フヲ稀ニ有ルノ
事ナリ故ニ王ト民トハ政黨ノ上ニ在テ常ニ協
和一致スルモノナリ但シ宰相ハ決シテ君主
ニ對抗スルコトヲ得サルナリ

山本製十

二十八年八月二十二年三月廿七日

官吏演説之件ニ付答
佛國ニ於テハ諸省卿其他貴顯ノ官吏カ公然ノ
演説ニ於テ政府ノ公務又ハ廟堂ノ旨意ノ全
體ニ就キ政談演説ヲ為スル事アリ
右ハ官吏休暇ノ時政事上ノ旅行中ニ於テスル
コトナリ
縣令モ政談演説ヲ為スルコトアリト云モ甚ク希シ
トシ且特ニ公然ノ祝典ヲ行フ席又ハ物産共



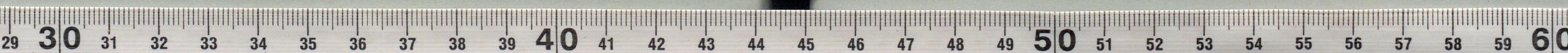
進會又ハ掘割鉄道ノ開業式等ノ如キ場合ニ於
テハ其ノ演説ハ大抵内國ノ安寧ニ関スル
事人民ノ協和ニ係ル事又ハ人民ノ業務ニ係ル
事ニ就テ廣ク一般ノ旨趣ヲ述ブルニ止レリ若
シ其他ノ事ニ及ブキハ退職セラルルノ旨ナル
下等ノ官吏ニ至テハ政談演説ヲ為スナク假
令一其職務上ノ事ニ関セサルモトモ是レ亦固ヨ
リ之ヲ為スニキニ非サルナリ

山本製(十)

然レモ或ル場合ニ依テハ内國ノ安寧又ハ人民
ノ協和ニ関スル常話ヲ為スハ勿論妨ケナシ

千八百八十二年三月廿七日

ホアソナード



國体ヲ議定ス下キ事也ハ其害則シハハカラス不
海外諸國立憲為政者多ク然レ其体々ルキ
差萬別ニ様々制ナシ皆其國固有ノ慣習也
當時ノ勢也故ニ因リテ以テ之ヲ制定スル者
ナリ我國開闢以來統々々々ルヤ入ルヤ
天祖ノ遺詔ト固有ノ慣習トニ因リテ其習
神聖相承ケ卓然不動以テ今日ニ至ル者ナ
リ其間武人專權ノ時ト雖モ未ダ曾テ人民

十八百八十二年三月廿六日
山本製(十)



○政權ヲ參事並リテアルヲ然ルニ維新
以降五十年條ノ御誓文アリテ八年四月十四日
ノ詔アリテ八年府縣會設立ノ布告アリ是皆
ト聖上ノ能ハ万国ノ形勢ヲ察シ人民ノ後
来ヲ慮リ尊權ヲ幾分ヲ割與シ給フ者トモ
言未嘗有テ殊恩ト言テ中ラシク豈敢
以民計國政權ヲ參事並リテ求ルノ理ヲ
國本ヲ恙ヤ然トモ專政ハ其害測ルヘカラス不
若徐ニ立憲ヲ制シテ永遠不拔ノ基礎ヲ
建テ君主ノ大權ニ非スニハ變換スヘカヤ

ト者主為スニ因テ古来ノ慣習ト今時ノ勢
トヲ參酌シ人民ノ參政ノ權ヲ許サシキ者
左ノ四條トモハ
一 憲法法律議定人民一般ノ權利ニ
關スル者ニ限ル
二 金賦租稅徵收并費用報告書ト檢査ス
三 費用預算書ノ檢査
四 其國界變換トシテ其目式トモ
トモ憲法ヲ假定シ勅許ヲ得テ先ニ
相如五年間元老院ト地方官會議トヲ以テ之
ヲ試シ其實跡ヲ就テ可否ヲ考究シ然後憲



法ヲ確定シ特命ヲ以テ之ヲ布告ス其時
財政目的ノ事云々其初ニ此ノ旨會ヲ以テ之

万機ノ事舉テ皆財政得失ノ関ス平心虚氣
以テ其利害ヲ辨セサル一カラス其目左ノ如

一 金銀貨以テ以テ貨幣原本位ニ為テ廢ス一
キ事ニ對シテ其旨ハ人々ノ知ルニ至ル

抑貨幣並ニ其者ハ物品ノ仲媒者ニシテ其革
タル其旨ハ紙幣ニ金銀ヲ並ニ其用皆同ニ而

ニ其旨金銀ヲ以テ最モ重トスル所以者ハ

其之ヲ得ルニ難キ力為ニ故ニ今金銀以

六 本位ニ廢スニ強ク物價本位ニ向テ高低

ヲ生ズル其理ヲ九寸ニ又人民ノ需用ニ

五 次ノ所アルヲ以テ若シ或ハ紙幣交換以テ乞

フ者ヲ以テ本國中所在ノ物品ヲ以テ其求ニ

四 應ニテ可キ同其紙幣一歳ノ入額ニ應ニ

三年々之ヲ製造其三年ニ至テ順次交換ス

三 此者トス如此ニ其旨自カテ物品相互ノ價格

ヲ本位トスルニ至ル故ニ貿易上内外輸出

二 入出平均ヲ生ズルニ至ル故ニ其旨自カテ

二輸出品不総テ洋銀ヲ以テ價格ヲ定ムルニ
事本出十八ノ一ニ至ルニ於テ買戻上内出
三國債ヲ起シ紡績器械并鉄砂糖製造器械并
建設ニ一意奮然其目的ヲ達スルニ事興ル
四諸官廳ニテ同ニ於テ事業ヲ各自ニ施行スル
ヲ禁シ便宜因時ニ合併スルニ事ヲ其末ニ
五諸官廳ニテ必用ヲ除ク外ニ功外國物品
ヲ使用ヲ禁ズルニ事ヲ八月ノ需用ニ
六各府縣ニ於テ特別ニ學校ヲ設ケ男女小
幼少遊戯ノ間諺於テ外國輸出品ノ内其地

方適宜ノ品製作ノ技術ヲ教育スルニ事
七綿花砂糖麥芦粟鉄工所等ノ稅額ヲ減スル
ニ事

陸海軍擴張ノ事

一海軍御ノ意見ト大同
二各府縣中學校ノ學課中ニ執銃運動ノ目ヲ
陸軍設ルニ事以テ本旨ヲ盡クシテ
此他其旨ヲ嚴密ニ守ルニ公平ニ精誠ニ一意
官並諸學校其試驗科目中ニ漢學ヲ加フニ事
博國交際ノ自由ヲ求ムルニ事



外國交際ノ目的ヲ定ムル事

右ノ諸件若其所管有無ニ拘ルズ互ニ虚心
平氣其利害ヲ痛論シテ之ヲ公平ニ歸着シ一意
到底百折不挫以テ本旨ヲ達セシメテ希望ス

一 武軍卿ノ意見ト大同

對西軍駐劄ノ事

干事

一 陸軍部ノ意見ト大同
一 海軍部ノ意見ト大同
一 農商務部ノ意見ト大同
一 文部省ノ意見ト大同
一 司法省ノ意見ト大同
一 大藏省ノ意見ト大同
一 外務省ノ意見ト大同

山田參議意見憲法ノ件

明治十四年
十月

河祖宗遺詔ヲ奉シ

天ノ保佑ヲ以テ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ナル大日
本國天皇特權ヲ以テ國家ノ基礎ヲ定メ上下
永ク其慶ニ依ラレト欲ス世衆庶夫レ之ヲ遵守
セヨ

憲法

第一編

國境

第一條

現今ノ國境ヲ限り大日本帝國トス

第二條

國境ヲ變更スルハ法律ニ依ルニ非サレハ之ヲ行フコトヲ得ス

第二編

國民ノ權理

第三條

大日本國民タル者ハ大日本國民ノ權ヲ有ス但

山本製(十)

憲法ニ掲
及ハス

其性質及ヒ其權限ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第四條

大日本國民タル者ハ法律ニ對シ同權ナリトス

第五條

人民ノ自由ハ犯ス一カラス但其自由ヲ壓抑シ又ハ其身體ヲ拘留スルコトハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第六條

人民ノ家宅ハ犯ス一カラス但其家宅ニ侵入シ及ヒ搜索シ并ニ書類ヲ提尋スルコトハ法律ヲ以



之ヲ定ム

第七條

總テ刑罰ハ法律ニ從テ之ヲ言渡し及ヒ之ヲ執行ス

第八條

所有權ハ犯スヘカラス但其公益ニ關スル者ノ處分ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第九條

宗教ハ自由ナリトス但開寺開場ノ權ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

山本製 十

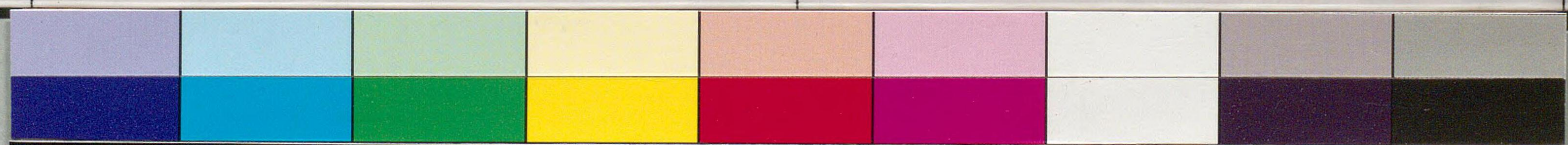
宗教ノ自由ヲ口實トシ國民タルノ義務ヲ免ル
ルヲ得ス

第十條

大日本國人民ニ言語又ハ文書又ハ圖畫ヲ以テ自由ニ己ノ意見ヲ述ブルヲ得但其自由ヲ制限スル者ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第十一條

大日本國人民ハ兵器ヲ携帯セシテ家屋内ニ集會スルヲ得公ノ場所ニ集會セント欲スル者ハ法律ニ從テ許可ヲ得サルヘカラス



刑法ニ觸レタル目的ヲ為シ結社スルヲ得
集會又ハ結社ヲ禁制スルキ者ハ法律ヲ以テ之
ヲ定ム

第十二條

内乱ヲ鎮定シ法律ヲ施行スル為シ兵力ヲ用ユ
ル者ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第十三條

大日本國人民ハ請願ノ權ヲ有ス但其制限ハ法
律ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條

山本製十

書簡ノ秘密ハ犯スヘカラス但刑事又ハ軍事ニ
關シテ搜索スヘキ者ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第十五條

大日本國人民ハ必ス國民タルノ義務ヲ免カル
ヘカラス但其制限ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

法律ニ從事スル者

第三編

第十六條

天皇ノ身體ハ犯スヘカラス

第十七條



天皇ハ萬機ヲ裁定スルノ權ヲ有ス

主權ハ三權ヲ統轄スルノ意

大臣參議卿ヲ任免スルノ權ヲ有ス

法律ヲ頒布シ又ハ法律ヲ施行スルニ要ナル

規則ヲ布告スルノ權ヲ有ス

第十八條

天皇ハ陸海軍ヲ指揮スルノ權ヲ有ス

第十九條

天皇ハ武官並ニ文官ヲ叙任免黜ス但法律ニ於

テ別ニ制定スル者ハ法律ニ從フヘシ

第二十條

山本製十

天皇ハ他國ト宣戰講和ニ又ハ修交并ニ通商條

約ヲ結定スルノ權ヲ有ス

第二十一條

天皇ハ大赦特赦減等赦ヲ為スノ權ヲ有ス

第二十二條

天皇ハ勲章及ヒ貴飾ヲ賜與スルノ權ヲ有ス

第二十三條

天皇ハ法律ニ從テ貨幣ヲ製造スルノ權ヲ有ス

第二十四條

天皇ハ議員ヲ召集シ議院ヲ開閉スルノ權ヲ有

又兩議院ヲ同時ニ解散シ又二院ノ解散セ
シムルヲ得
然レ之ヲ解散シタリト雖モ又更ニ之ヲ開カサ
ルハカラス
天皇ハ議事ヲ延會スルヲ得但議院ノ承諾ナ
キ者ハ三十日ヲ過クハカラス
第二十六條
皇位ノ相續ハ皇統相續法ノ定ムル所ニ從テ相
續スハシ

山本製十

第二十七條

天皇ハ滿十八歳ヲ以テ丁年トス
第二十八條
天皇ハ元老院議員及ヒ民撰議員ノ前ニ於テ憲
法ヲ守持シ國政ヲ施為スヘキ旨ヲ誓言スヘシ
第二十九條
天皇幼年又ハ疾病等ニテ萬機ヲ裁定スルヲ能
クサル時ハ天皇ノ最モ近親ノ皇族ヲシテ攝政
トシムヘシ但其攝政タル者ハ其可否ヲ兩議
院ニ下問セサルハカラス

第三十條

攝政タルハキ丁年ノ血統者ナキ時ハ内閣ニ於テ
テ兩院議員ヲ召集シ攝政タルハキ人ヲ撰定セ
シムハニ其被撰者攝政ヲ為ス迄ノ間ハ内閣ニ
於テ庶政ヲ施行スルヲ得

第三十一條

攝政者ハ天皇ノ名義ヲ以テ政務ヲ施行スハニ
撰政者ハ兩院議員ノ前ニ於テ国王ニ忠節ヲ盡
シ憲法ヲ遵奉シテ国政ヲ施為スハキ旨ヲ誓言
スハニ

山本製(十)

第三十二條

天皇ノ年全

第四編

第三十三條

大臣參議卿并ニ其代理タル官吏ハ兩議院ノ議
場ニ臨ニ何時ニテモ自ラ求メテ發言スルヲ
得但其議員ヲ兼ホタル者ヲ除ク外ハ可否ノ數
ニ入ルヲ得ス

第三十四條

兩議院ハ何時ニテモ大臣參議卿ノ臨席ヲ求ム



ルヲ得

第三十五條

兩議院ノ内一議院ノ決議ヲ以テ大臣參議卿ニ

於テ左ノ三項ノ罪過アリ者ヲ告訴スルヲ得

一 憲法ニ背ク者

二 賄賂ヲ受ケタル者

三 叛逆ノ罪アリ者

其告訴ノ事件ハ大審院ニ下付シ全院會議ヲ以

テ判決ス

第五編 三十一條

山本製 十

議院

第三十六條

元老院并ニ民撰議院ハ法律ヲ議定スルノ所ト

ス

兩議院ノ議定ヲ經タル者ニ非サレハ法律タル

ノ効力ヲ有セズ

第三十七條

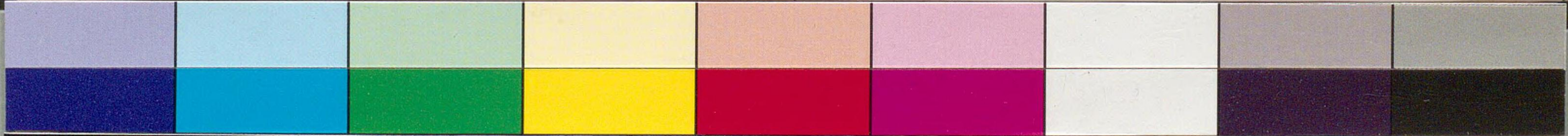
公安ヲ維持スル為メ又ハ非常急遽ノ場合ニ際

シ兩議院閉院中ハ内閣ノ責任ヲ以テ布告ヲ發

シ法律タルノ効力ヲ有セシムルヲ得但其布

憲法ニ

○



告ハ次ニ開院ノ時ニ於テ兩議院ノ認可ヲ得サ
ルニカラス

第三十八條

天皇又ハ兩議院ノ内一院ヨリ否ナリトシタル
法案ハ該議員任期中再ヒ之ヲ出スルヲ得ス

第三十九條

元老院ハ天皇ノ布告ヲ以テ之ヲ編成スヘシ
元老院議員ハ世襲又ハ終身又ハ定期元老院議
員ト為ルヘキ權ヲ與ヘタル者ヨリ撰擧スヘシ

第四十條

山本製(十)

○
民撰議員ハ大日本國民ノ滿三十歳以上ノ者ニ
シテ府縣會議員タル者ヨリ撰擧スヘシ

第四十一條

議員撰擧ノ方法ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第四十二條

民撰議員撰擧ノ期限ハ四年トス

第四十三條

兩議院ハ同日ニ開閉シ兩院議員モ亦同日ニ召
集スヘシ一院ヲ解散セシメタル時ハ他ノ一院
ハ直ニ議事ヲ延期セシムヘシ

第四十四條

兩議院ハ職務章程ニ依リ其事務并ニ懲戒ノ規
則ヲ定ム

第四十五條

元老院ハ議長副議長ハ天皇之ヲ任ス

第四十六條

氏撰議院ハ議長副議長ハ該院ヨリ奏上シタル
應撰者三名ノ内ヨリ撰擧天皇之ヲ任ス

第四十七條

兩議院ハ議事ハ傍聽ヲ許ス但議長又ハ議員十

山本製十

名以上ハ參議ニ依リ傍聽ヲ禁スルヲ得

第四十八條

西議院ハ議員過半出席スルニ非サレハ議事ヲ
為スルヲ得ス

兩議院ハ議事ハ過半数ヲ以テ決ス

第四十九條

西議院ハ天皇ニ建白スルノ權アリ

第五十條

何人ニテモ兩議院ニ諸願書建白書ヲ差出ス
ヲ得但諸願書建白書ハ郵使ヲ以テ差出ス

第五十條

兩議院ノ受取タル請願書建白書ノ取扱ハ法律
ヲ以テ之ヲ定ム

第五十一條

兩議院ハ其間涉スベキ事件ニ付其事實ヲ明ニ
セント欲スル時ハ委員ヲ命ジテ之ヲ審査スル
コトヲ得

第五十二條

兩院議員ハ開院中議院ノ許可ナクシテ犯罪ノ
為メ審問又ハ拘留セラレ、且ナカルニハ但現

山本製十

行犯又ハ犯罪ノ翌日ニ於テ捕縛ニ拘留スルハ
此限ニテラス

第五十三條

兩院議員ニ對スル刑事審問ノ為メ拘留又ハ民
事ニ関スル拘留ハ開院中議院ノ求メニ應ジテ
之ヲ停止スルヲ得

第五十四條

國會議院ハ法律ニ從テ旅費日當ヲ受取ルニ

第六編

裁判權

第五十五條



第五十五條

裁判權ハ法律ニ從テ獨立ニタル裁判所ニ於テ之ヲ行フヘシ

第五十六條

何人タリモ其所在地ノ裁判權ニ服セサルヘカラス但特ニ法律ヲ以テ定メタル者ハ此限ニアラス

第五十七條

何人タリモ裁判所ノ陪審人ト為ルヘキ撰擧ニ應セサルヘカラス

山本製(十)

第五十八條

法庭ハ傍聴ヲ許シ審問裁判ヲ為スヘシ

第五十九條

親戚ニ関スル事件并ニ禁治産ノ事件ハ原告ノ内一方ヨリ傍聴ヲ禁スルコトヲ乞フ時ハ之ヲ禁スヘシ

第六十條

如何ナル事件ニ於テモ公衆ヲ害シ又ハ風俗ヲ乱ルノ虞アル時ハ裁判官傍聴ヲ禁スルコトヲ得

第六十一條

摩有書

正編會計部
總整理

如何十ル事件ト虽モ裁判宣告ノ時ハ傍聴ヲ許
ス一ニ

第七編

會計

第六十二條

政府歳入歳出ノ金額ハ毎年豫算ニ其表ヲ作ル
ハ豫算表ハ毎年法律ヲ以テ確定ス一ニ

第六十三條

租税及ヒ其他ノ收入ハ會計豫算表ニ掲ケタル
ノ又ハ法律ニ於テ之ヲ定メタル者ニ非サレハ

山本製十

徴収スルヲ得ス

第六十四條

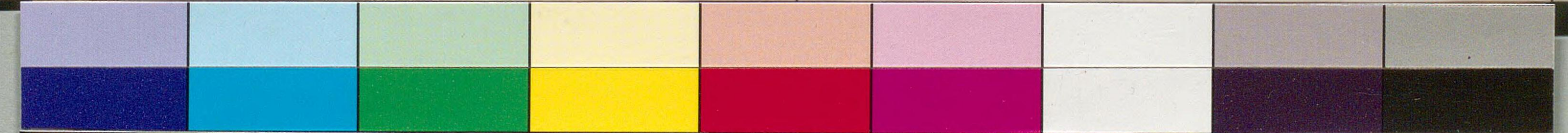
政府ハ法律ニ從テ國債ヲ起スヲ得又法律ニ
從テ保証ヲ為スヲ得

第六十五條

政府ノ支出金額若シ豫算表ノ高ニ超過シタル
時ハ後日西議院ノ認可ヲ得サレハカラス

第六十六條

會計豫算表ニ係ル決算ハ會計検査院ニテ審査
確定ス一ニ而シテ其精算ハ毎年國債ノ勘定書



ト共ニ會計検査院ノ意見ヲ付ニ兩議院ニ出ス

第八編

第六十七條

官省院府縣ノ制ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第九編

第六十八條

兩院議員及ニ政府ノ官吏ハ天皇ニ忠節ヲ盡シ恭順ニ奉仕シ且憲法ヲ遵奉ス一キ誓約ヲ為ス

山本製(十)

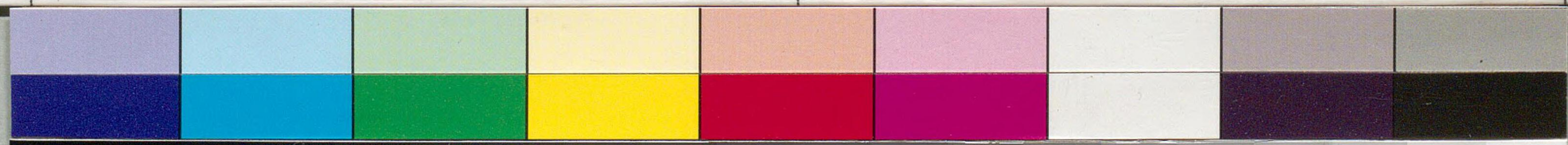
軍人ハ軍人誓約ノ法ニ從フヘシ

第六十九條

從來ノ租稅并ニ其他ノ收入及ニ法律布告布達ノ此憲法ニ抵觸セサル者ハ法律ヲ以テ之ヲ改革スル迄ハ之ヲ徵收スルヲ得且其効ヲ有ス

第七十條

戰時又ハ内乱ノ際ニ於テ公安ヲ妨害スル虞アル時ハ其時間ト其地方トヲ定メ憲法第五條第六條及第十條第十一條第十二條ノ効力ヲ停止スルヲ得

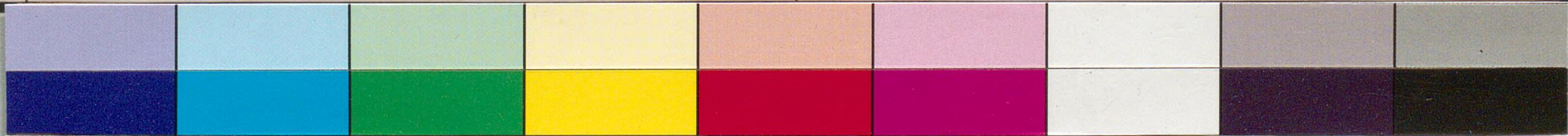


第七十一條

憲法ハ改革スヘカラス但第十六條第十七條第
廿六條ヲ除ク外ハ議院全負會議ニ於テ四分ノ
三以上ノ同意數ヲ得ル時ニ之ヲ改革スルヲ
得

明治十四年九月

山本製

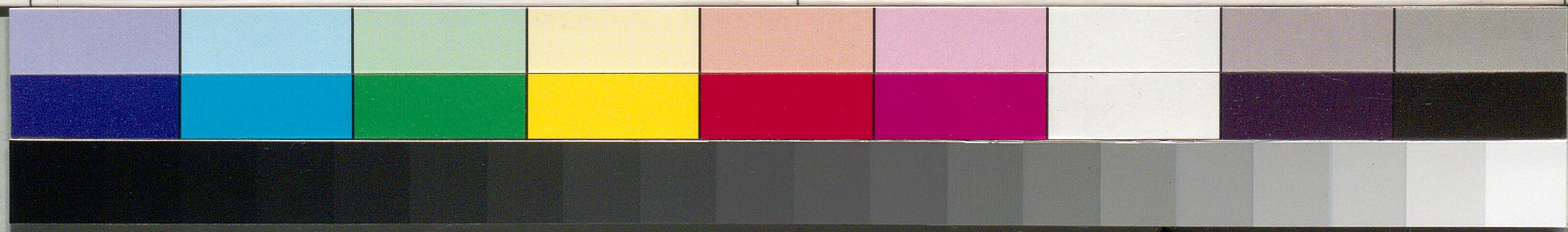
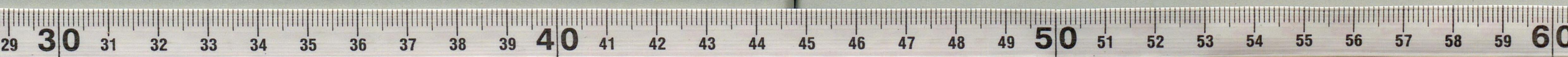


第七十一條

憲法の改革は、
廿六條、
三以上、
得

明治二十七年七月

山本



国立国会図書館 尾崎三良関係文書 128